



門 利 10  
 號 714  
 卷 2

明治三十八年十一月五日  
 平内 隆成氏 寄贈

平内 隆成氏 印

くほふさ 河海は阿のま  
 も曲のまをいひか  
 たりこめて  
 くれとめてま乃の清も  
 まし  
 河のまをいひか  
 まれ小序也

平内 隆成氏 印

花はさうり小月いらく  
 のとらう物久。ぬよむひて月  
 とこい。されとめてま乃の清も  
 ぬもあはれあられは情あり。され  
 ぬへきけのの枝らり  
 くれ。まれと入るまの。むんよまうれ  
 やくぬさよたれ  
 あもかろふ。むさたてと入るお







推ば来らるかあまのぬきさうやうさう。あはれ人よ

きうめきさうさう。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

さへて月花カ。莊子駢拇。篇吾既謂明者非謂其見彼也。自見而已矣。一。

遵生八箴五云水樂洞雨後。聽泉我輩豈無耳哉更當不以耳聽以心聽。

春八家と云々。山谷詩。春去不窺園黃鸝頗三請。月の夜ハ園のち。杜甫詩。今夜鄜州月。關中唯獨看。

ハむさふさうさうさう。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。

あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。あはれ人よ。







みとおとひよすせむ。牛飼下部あふのるれる

きくく〜 美藤の義

也

色あり。おうくもさうくく

と。はらくよゆふ。見るものほくあつてくわ

よ。たぐあへつる車とも。あまくなもつる人も。

いつくはつらん。かどあくまはよありて。車まの

らうくりき。あそれかりき

らうくりき。あそれかりき

也。源氏タカがよらうかり

き。大海よまに〜

とあり

〜のさうり〜ひ。めれまふよ

すくれ〜も。横あのを

さひ〜きよありゆ〜。せれ

具あり

世の〜。衆の終つて

て。世間治乱盛衰のり

をい〜

大海とらう。見物群集の

人の〜を終つて死ねへ

我も〜教よん

とらう。源氏類聚三巨と等

とい也

あつてありぬ。世人教もさの〜

〜人みか〜せあ〜は我か死ねへ

とらう。聖水と。漏刻の

後漢書王符傳山林不能

野火江海不能實

〜

〜とも。か〜まらつをぬ

〜。たかき〜うつもの水

た〜の〜ひ〜れて〜

大海とらう〜

〜の横あれ〜

〜人乃〜



とて。がうき穴とあせりてよまはるゝもまをく  
あゝとくもも。たこたつたのさつりゆうにやうく  
つぎぬへ。故の中よおがき人さふらうはあらんか

一見一人二人のさうんや

神代卷上云伊弉册尊曰愛

也吾夫君言如此者吾當殺

殺汝所治國民曰將于頭伊

弉諾尊乃報之曰愛也吾妹

言如此者吾則當產日將于

五百頭

多於頭 上卷よりしり

舟器 西抄のさし

舟器乃すまのつてれさるゝ

ら守。一見一人二人のさうんや。  
多於頭船器とてぬ野のま  
とらう。うすあうらうあは  
まらぬ見のさ。まてはくし  
たさくもの他さうらう

ひりの人よあさのさう  
むつとむさくもの

淮南子蘄指者欽民之疾病

躑躅也 植以盛屍也

たのあ。さうあまのしり  
あまのさうあ。あまのさう

死あり。さあまのさうあ。あまのさうあ。あまのさうあ。

まはるゝもまのさうあ。あまのさうあ。あまのさうあ。

ゆてまて

二一三五二二四一一三三一

二二一かしのさうあまの

さあまてかまて十

あまのさうあ

あまのさうあ。あまのさうあ。  
らあまのさうあ。あまのさうあ。

あまのさうあ。あまのさうあ。あまのさうあ。あまのさうあ。







ころ夢とてあれの白つら  
——

實方

わすへ乃あひひと人のとくひとも  
うらそのくそれきつらわれぬ  
返——

旅よりあふむのこころやれ  
あられとこころやれものこころき

ととらきいれ。ころあひひまきさつらうきさると

枕草子 漢少卿云作三冊あり  
鴨名ゆきて季物語 口巻あり

くそむ 公事根源云五月五日  
節去天皇武徳殿より出涉あり

さて安全とせりは群臣は  
酒とほかり内弁まこととほ節

みどろ夢れかたつらありたり

とよめりも母屋のこすよあひひ

のころころころきさよあひひは。

家代集よりきり。あつれとこれ

もゆり。枕草子よも。ころころ

らひ—き物語れころ夢るとか

きりころ。わら—くあつじう

よ回—人々皆あやめのかつ—  
とかく日くきのころうれと—

曲も春はあめれ—こをきり  
群片よきまをたまあふまの

いととらつてむらよあつれ  
悪鬼をくらふとやむ文はり

荊楚歳時記は長命湯は後  
満くあるもこれまう—

枇杷皇太后ま 昭宣公の女  
朱雀院の母右摠子

おきぬねと 十載集弁乳母  
あやの字泪乃まぬまうへて

おきぬねとまとうかきり  
返— 江侍送

おぬき—あやめ乃まらまら  
流母のあまんとものこやん—

あひより—き鴨の長めくは季

乃物語も。あつれ—ははあ

ひま—まのりたりとそかきり。

とのきとらつたよころあつと。

なつあつらつらりすり入き。

あつよかきつらつらとむも。九月

九月菊にとり人らつらとむへん。

あつぬの菊のわつとまてとあ







友近の梅 内裏よえ近の梅

ふ近れ梅あり

ことやう 異風祥也

あらたき 幸外ありことと

きこえ也

ぬちけり 後の字あり口

きこえもしきせり

あゝや児のよがの二ありて

いもかゝもぬちき人か

邊さく 耽梅と云 正荆公

詩山櫻抱石映松枝比並餘

花前寂遅 只有春風嫩寂寞

吹香渡水報人知 いろとや

集まは山梅と影ぞり全芳

備祖は梅桃の部よ入り

彦き梅 東坡詩二月驚梅晚

しじいのしきとらとじくじ

梅はちろきう午お梅いそへか

るうとく咲らるもうさありら

紅梅け白ひめてくはれもこれぢ

しどうき梅ハ梅ははれあひて

おやえとらきとさされてえさ

よとがこしきとらあひひん

あうりせんとれてらりらうさ

幽香此地無

系極入道 風雅集十五定

家得えやうすきう家お

ちとー立入てりてんはる

たりかのとらとらへてはき

お梅乃未だえとら梅ひつ

きをあり

永福門院因信

こすきあ宿ハ着よはやう

うらぬ影よあけ梅うえ

返一 前大御公為世

くらゆるさき影え乃梅くも

まゝらうへきまをまう

卯月とくられまう

杜牧詩霜葉紅於二月花

さひ或又新緑勝花

とくわうとく。系極入道中

納えいあといと人梅とらん

らうらへられらりきう。系極の

なれ菊むきふのんも二本

けうめり。柳又たう。卯月うり

けまうかえて。とらてよろつれむ

おあももまらりてめくされ

おあり。はらたれかつ。いつきと



とあるん

池も蓮 謝灵運庐山入

て東林の池と有り蓮と

へ有り蓮は葉と花ともの

ちまれともくとも有り

さハ因縁あり

めでたし物あり 斐とんき

物也と云々也

きちらう 桔梗也古今池の

名のきよ

秋ちらう叶ハ成はるり白

とせらるるももふりり

らとよ 紫苑也やとひと

す

つととやう ちらうはと云

たあり

金瓶梅三

本を物ありたあうり。さあ

山吹菘か記つてあてし。

池も蓮。秋乃るまを萩落

きちらうう秋女郎花。あち

う後志とよ。さあもかうか

アんはるきく。芙蓉もは

らとと朝うや。さあもく

らとす。さあやうあう地

むのの、葉のなるといれか

秋ももももももももも

アんはる 龍騰也 古今よ

我やうの長あくらうのをも

のらまくれやとてあもも

黄菊 月令よ菊の葉花とわ

進ハ菊花を葉あうとて

さうやう 河海は油と許

かしらきとらな 丹桂は木

とをさし桂く秋葉もさ

けりひのなまももももも

あんとがももももももも

さうさしとらな

てありあん

あ物あり。さあうれ物な

い。さうさぬ人乃るさ

とめつ。さあうりうと

あうりかす。おか

く。ちもんまれぬま

あう物。かめ記うら

うぬの。さあうりの



賤跡と山谷詩遺金浦藤常

作史 伏波將軍の賤と親族故曰

に字へ施して世の人代あつたとき  
ハ守儀の奴まうとそり

身死して賤跡と云ふ。習者乃

せうら也。ようぬ物たぐハ

へ至らるも拙くよれ物ハ心とめきんとはうき。

ころくおろるましてはけ。我うえめあや

りかものものありて飲ぶあひらうとぬわ。ぼハ

後よとんさす物何ら。しきんうらおうゆつる

へき。物々あつてうらうらんと物うあつめさかハ

何ものころく拙あつたか。け

悲田院 拾芥中未云在鶴川  
西畔施藥院別取也養孤子

病者也

病者也 無双 無左右

あつたものさき也

吾妻入 吳かよあつたはゆ

ちとありゆうさハ猛者也

時中氏尊東社の内橋姫海

よりの死寸尊ゆりよりゆ

返うて東をかくりん精姫の

みとぞい出ー吾婿やとの

たまひしうらあをあつた

とつ小田中記は元元はゆ

も須くあつたハ文選を引

意最とあつたよむとあれ

くあつたよかまうらうら

悲田院乃其蓮上人ハ俗姓ハ

三浦也あふりともや。はうあ記

氏者あり。故云の人代あつて

物後ととそ。あつたは人うらひ

つうしたたのまるれ於此人

ともうき乃ともうて。突あ

とつひし。聖それハさう我

おろすう然とも。そのまハ都に











かゝり 妻子也上卷より久

たり

ぬすみともまろくは

後漢書曰祐順帝時遷膠東侯相祐政惟仁簡以身卒物吏民懷而不欺畜丈夫孫性私賦民錢市衣以進其父得而怒曰有君如此何忍欺之促歸伏罪性慙悞請鬪持衣自首祐屏左右回其故性悞述父言祐曰椽以親故受汚辱之名所謂觀過斯知仁矣使歸謝父還以衣遺之

人恒の産るべき時を 孟子梁

惠主上篇曰無恒産而有恒心者惟士為能若民則無恒

金瓶梅

五

日とれぬすみもまろくは  
あり。はきえ置人ぞいませ。  
むりもとのつとせんありハ。  
世の人れんともむじうぬやう  
よ。世よおとあはかりきあり。  
人つみの産るべき時ハつとれ  
ひま。人きくありてぬす  
す。世にさあうとく。凍餒

産固無恒心為無恒心放肆  
邪後無不為已及陷於罪然  
後從而刑之是罔民也焉有  
仁人在位罔民而可為也是  
故明君剛民之産必使仰足  
以夏父母俯足以畜妻子樂  
歲終身飽凶年免於死亡然  
後驅而之善故民之從之也  
輕云云黎民不饑不寒然而  
不王者未之有也

人きくまろくはぬすみハ

家語云歎窮則擢鳥窮則鳴  
人窮則詐 海鏡よ小人窮  
まろく時ハあまはまろくとあり  
もけん

凍餒 孟子盡心篇所謂西伯

のろくしとあうん。とくれきた  
ゆへうす。人どろくし先法  
とまろくさしめて。そまろくし  
まらん事不使のよとせ。とて  
いへうて人とめくむへきや  
あうん。このとろくついやと  
西をやめ。民とあて農とす  
めん下よ利あらんまろくこうい



善哉老者創其甲里教之樹  
畜導其妻子使養其老五十  
非帛不煖七十非肉不飽不  
煖不飽謂之凍餒文王之民  
無凍餒之老者此之謂也

あつへうしん衣食よのつひまう  
くふ。僻ひがしりせん人とう。後志  
盟人めいじんとまのあるまき

終享 終也享ハ助字  
いりくろりー ありきりとかめ  
ころあり

人乃終享れありはんのい  
ころりりあも。人れかろ

あやーくともあつ相とがろり  
つき 舟物の瑞わありたう  
よとまてともとよりまきり  
ともかろりつろりあり

とまきり。い。園のていこれ  
はとく。ちみくかの人まは。まろ

うあろ人いあやーくともあつ相とがろりつき。いひ

こともあつまひも。どのれこのむいようめあて

あろ。人れ目。ろのむさよのあしやあおが

ゆき。此大事ハ控どんげ化れ人もさいじへくす。特

学の士もえろへくす。どの世しうあま

あ。人の刃きくよまよあへくし

梅尾の上人 明惠上人あれ  
へーき辨也 梅乃尾れ上人とる活けり

宿我罔發の人 前生まて修  
練まろ功徳の閑發して ぶ。河まて馬あらふとの。あ

今阿字と唱るとあり又自然  
發得まろとまのあり くといひきれ。上人まとま



府生殿 職原下云左右近衛  
府の生、木將判授之木納言  
木將、不召仕、府生、木將以上  
召加、府生也又左右衛門左  
右兵衛ももみか府生あつて

阿字本不生 大毘盧舎那經  
有情及非情阿字第十命  
又云我覺本不生  
新羅國靈妙寺僧不可思議  
釋曰秘密中秘釋者阿字自  
說本不生

あトアふふ  
あ。阿字か不生よふうあまれ  
とさううれとて感涙とのとれせうとと

て。あおたうや宿執軍政れ  
人うあ。阿字くととああうそや。

いうあう人の内馬う。あまうよ  
たうとくお不ゆういとさう

結々れ。府生殿の内馬ふ  
とさうう。あはめてうれととり

あ。阿字か不生よふうあまれ  
とさううれとて感涙とのとれせうとと

三つんえんそく きのこ  
阿字が素の重躬。水面下野入道信躬を。

落馬の相あう人あり。結々つーとまへといひ  
きうと。いとまうとーかうにさひううよ。信躬を

ありおらて死ようり。道よ長ーぬう一玄祚  
のうとーと人さへり。まそいうあう相うと人の

とひふれ。きはめて枕ちりあて。沛艾れ馬を  
沛艾 女選藉田賦。龍驤騰驤  
而沛艾注馬行兒

は相とあふせけき。沛艾相産  
よやまとらうとあせせ



いつらハアやまうらり  
何の字といつても也

明雲 久我太政大臣雅實公  
孫顯通卿子也山内座主也  
其まのりてをたまひたり

享永二年天台座主明雲僧  
正と法住寺の法衣招後  
延へり十一月十九日木曾義  
仲兵と卒し法住寺殿を  
責やうり傍にふるまふて  
道んと志多ひたりと木曾り  
大将楢六郎教忠に放矢は  
依腰の骨を射りて真逆は  
流るひもあがり流るり  
けつと教忠り命未流言命

あまうらりいひまうらり

明雲座主お老よりあひ流る

そのせきう一合伏の鞆やあ

ふとたつて流きれお人まこ

とにまおおりまするやいり

あうおるとるあられの傷害

乃あうせたります海きん

方あてかやいもあつたかり

此頭と盛衰記三十日一  
えり

おまあやあまきりまりとやたりと

てまお何たりてうせ流りたり

拾式 嵯峨天皇乃時弘仁格  
弘仁式と撰と清和天皇の

時貞觀格貞觀式と撰寸醍  
醐天皇の時延喜格延喜式

と撰と是と三代格式と中  
也律と令とふ舎て明法家

又性士とより  
等もも刀をえすと持

四十年の人 明堂炎經 曰男  
子三十日上不可不養三皇

四十年後乃人かお灸とくく



三里所以下氣也

金瓶卷三

十一

て。三里所以下氣也。あり。必き。うすく。

麻茸を鼻小あて。かくん。

は。ちのさだ虫ありて。鼻より入

て。腦まとむむと。いん。

麻茸 麻のやうな角也 本草  
曰不可テ以テ鼻ヲ嗅ハ有リ小キ白キ虫ノ視シ  
之不見ハ入リ鼻ニ必ズ為ル蟲ノ類ニ類シ不レ及ス也 瑣碎録云鹿茸麋  
香肉苁蓉切不可就鼻聞蓋  
有微蟲

強をつらんとする人よくせむらん程はなまぬい  
ふ人よきとれ。ちこくあひえてさく出  
つらん。いん。かめと。つしよめれと。

かくん一人一蕪ワもあひうり。いままこ

堅固けんこくさうり。一向初  
心の時しのりりとあま

つせあつままて。強面強類  
おままつつくく蕪ワははままて

と云發也  
天性その骨 生さつきの器  
用也

あひます 泥ぢまますすははままこ

あひぬこ  
堪張 蕪ワははままここうう選用  
あり

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云

さくさき 海の長もく  
不堪 かなぬ候へ手器用不  
あを云



源蒞 二名ともしよかたきまき

恥辱をかくるべき也

乃のなきてたゞしく 法を

とまらあり

放捨せされん せうりよせま

亦華也

世のろくせ情士と事世世もの

ありと云あり

善珠法師ハ支那皇太后の華

子也汝口となて唯識とま

へしよらありありゆへよみち

く恥辱とていひんくんけ

とつとあてき月のありきり

くへんれて丸のくくたれ

賢賢もなき者あまてや

はさりまれん度く云を

よりハつあよよよれ位よ

くも海うき人よゆりされ

て双ききききききききき

の地れよよといへとも娘ハ不悔

乃安えもあり。今下れ取捨も

ありきされともを人みられ

ときてくしくきききききき

て放捨せされハ世れんせり

てあ人の師とあうり法を

かろく人くくく

或人乃いんく。ま又十おさる

まて上よよいんくくくく

といほつへき也。んきこからふ

へき初来とあり。老人のよを

ハ人もえんくくく。能よありハ

いんくもあひまへんくく。お

ありせり

論語子罕篇

後生可畏焉知來者之不如

今也四十五而無聞焉斯

亦不足畏也已 大戴禮修

身篇曾子曰年三十四十之

間而無藝則無藝矣五十而

不以善聞則不聞矣七十而

未壞雖有後過亦可以免矣

ゆりくおんえんくく。ま藝の

床くくおんえんくく。ま

おんえんくく。ま



かろいよろつめの志とてハやめて眺ありこよめや  
 ともあつたかきれ世俗のともふたつさうりて  
 生涯とくす下悪の人せゆうしくおひえ  
 せしとままあひきくとももを強とまうりお  
 へおつうあうすしてやむへ。まもより  
 のろむともあくしてやまんハ中一のふまら

西大寺 大和國よりあり七太  
 寺のうら也

西大寺 静然上人腰くあり

拾芥云高野天皇天平勝寶  
 元年創之至天平神護元年

肩志ろく。波よそくたきこり

十七年造畢 詳續日本記

西園寺の内大臣 貞衡公也

有さ海めて肉裏へまのく

左府公衡公の男又竹林院  
 と号す

ころまると西園寺内大臣殿

資朝卿 權中納言從三位檢

あかたうとれきしきやや

非違使別當後醍醐天皇時  
 人也日野俊光卿三男

信仰のきそくありきれハ

むさしひて 莊子は競の  
 字とさしあふとあり

賢翁これとんで。年のよ

ましりよふとやされたり。後

思ふむく人の跡やしくむさしひて。毛をけ

ころとむらせて。けい氣をたうとく思えくゆ中



て。内府へまゝにせられしうりきりともせ

為兼大納言 毘沙門堂と號

定家 為家 為教 為兼

為兼大納言八のめしこれ

推大納言正二位應長元年依勅撰進兼集正和元年養覽之日二年十月十七日剃髮同四年十二月廿八日東使とて召とられ佐後へ流罪せしふ公卿補任よりえり 或説は為兼佐後流へ流罪しふ公卿三首とてみ阿蘇院仙とてふまを笠接すらしふまよめりまよめりて教史して嘉元二年歸洛と云

風雅集より兼東へまゝりせ

て。武士ともうらかこみて。六波

ふよむと門と流りきりによめ

種へおて移され賢給卿一

やと川といふかみまふかみせん

条とてりまて。是とててあお

ろりきせのこあつとむとては

浦山。世にあらん思出かしく

六波羅 北条家真人の一族

西と兼初よりきき西國の

ぬと初りむをよ六波羅

号寸東鑑より伴あり

あつま川をれとていれり

い人 賢明也といふは皆賢

明なるとてりい人といふ

あつ志氣ましくい人まあり

伴 益山あり

い人 東寺門はぬやとりせ

のあつまりわらう。まも是もねらゆらう

らう入るて。いつくも不<sup>ふ</sup>に<sup>ぶ</sup>とやうあつとてん

らりくふたらひるたれせとれ也<sup>の</sup>を<sup>の</sup>せとらうい

せりりとあひてまもりぬきりかとよ。やそをれ

奥つもそ。んまらういせくおがえくれはきりすお



不ふめつ〜かぬ物よハさういひて。ゆりそ  
 後。このるうへ本とこのまて。とやうは曲折まがまがあり  
 とりもゆりそ。目録よりこと〜めつうハ皮かこハ物  
 成をすうありゆりそ。真あくおぢえされハ  
 神しんふえられきり本と色。なれり〜と〜と  
 入りり。さもありのぬへき事也

機嫌と云々ハ仏書よ出り  
 耳よもさういひ 漢書張良傳

世よさ〜ころん人ハ先機嫌を  
 ち〜へ〜つのであ〜き〜ハ

人の耳よもさういひかあもたういひて。そ〜あり  
 こと〜のぬり〜と〜へきあり。但病やまひと〜を  
 子〜と死ぬる事れと機嫌と〜つ〜あ

生位異滅 藏業法数曰四相  
 小廉しんあり生老病死ハ廉  
 の四相也生位異滅を細の  
 四相あり生ハ生れゆりま  
 位と人間は居位して對  
 とあり吳ハ病と〜と〜  
 形よあり滅ハ死去也

けき河の 論語子罕篇  
 在川上逝者如斯夫不舎  
 夜 程子曰此道體也天運

そ〜やむ〜と〜。生位異滅  
 のうりりりりま〜との大事  
 ハだけき河くの〜れきりあり  
 あり〜と〜。さ〜も〜と〜  
 らす〜と〜らよあ〜と〜いゆ〜と



而不已。日往則月來。定往則  
暑來。水流而不息。物生而不  
窮。皆与道為体。運乎晝夜。未  
嘗已也。

真俗 真出世間俗世間也

美くれては 六韜云春道生  
万物榮夏道長万物成秋道  
歛万物盈冬道藏万物靜盈  
則藏則後起莫知所終莫  
知所始

秋名かよひ

下々子水子秋子かなより

むと小春のよまへす

小春 初学記冬日其暖如春

故謂之小春夏文類聚前集

十月の初よんえり

の也。されば真俗よつきて。必  
く一とせんとおりんこと。ハ機嫌  
とよへくは。とうれよふいお  
く是とよとよむすきあり。  
美くれては。夏よあり。夏つて  
く秋れらるよあり。美くや  
て。夏のきとよ。夏より  
す。秋かよひ。秋ハ別を

あり。十月ハ小春ハ天氣。夏も暑くあり。梅もつ不

とぬ。本夏のあつても先ねらてめくむらあり。

下よりきさつとらふとてあつたなり。

ひうらう氣下よあおせうら故よ。あたらうら流

いて甚とや。生む病死のうらりきとらうら

何季ハあは 何季次第あは

ゆへに何序と云也。何序と云

色先也

死をいついそとゆらす。死ハあよりともきこ



association

らぬ。かひくうらりよせりきり。人皆死ある  
もよあつて。まつことあつてもきうあつた  
ふ。おがえして来る。沖のむこううまれ  
とも。破よりあかのまうらうあつ

大信乃大饗 大信乃官も任  
せしあつ時の饗應也

大信乃大饗はさう人きあを

守治乃大信 守治の悪作  
府頼長保元の乱よりこれ

守治乃大信殿ハ東三條殿

たまひぬ光ハ知是院関白忠  
実公の二男法性寺関白忠

守治乃大信殿ハ東三條殿

通公此弟也  
東三條殿 拾芥中未云四條

あつたあつた。肉裏まで

院謀生(重武)重明親王家云  
云二條南町西南北二町忠  
仁公(家貞)信公(大)道殿傳  
領長久四年四月晦日焼失

ありきり。破やされけり。あ  
よるまで。代あへ行幸あつ

きり。させふこと。のよせあきこと。女院の  
あまかり。故実あつとち

筆城さきハ抱くれ。樂器とされんきとだん  
とあふ。置城とれん酒とおもひ。さの城とれハ  
撫うこととあふ。大鏡師  
輔公の傳よまよとせたまよ  
とあり双六のよをいひ  
あつた

うさんこととあふ。あま必事  
おあつてきうらうらうら



不義の戯と 詩云善戲謔号  
不為虐也

聖教 経滿等と云

あつらふ後 暫乃字也 自地

と云云

在本 論語注 卒尔 輕遽之見

不義れたるを身とあるすへく  
す。あつらふ後よ聖教の一方  
と云す。河と云く前後に文  
も入りぬ。卒尔と云く。此れ事  
もあり。かりに今に文と云るをさうと云へ  
多と云らんや。是れ少くおれ蓋まり。公さ  
おろしとも。仏教よある。すずと云り。強  
らる。あつらふ後よ。若葉とのつら。修せられ。教

繩床 梵洞經よ菩薩十八物

のうち也 李白草書歌行

宣州石硯墨池先吾師の羽獲

倚繩床 謂懷素

理と云るも 少と云るも  
理と云るも 少と云るも  
事と理と各別みて一偏  
み着るも 一理際事際と  
けりてきりて事理不二と云  
つら合家の偏也か相不背  
肉性必熟と云も惠心の僧  
都此帝後也

不義乃こそ成とつらと云ふは  
たつひをせ給ふ。變高と云侍を。そそおろりき

の公さるも 繩床よ坐せえ。あ

わえす。て 修定あるる。

事理と云るより二あり。寸。外相

と云らむ。むり。これ。肉性必熟。

と云て。不信といひへり。寸。あひ

さ。これ。と云らむ。むへり。



寢當 韻會堂丁浪反底也

子玉在無當註無底也

魚道 下字集云魚道建殘孟

也以餘瀝洗孟痕喻之魚道

舊道故曰魚道也魚雖游海

大海終不悉旧道者是又出

所未詳也

みかむとん 公家の表袴戎

ハ聖道の装束うとのかきり

よ糸をひてむむひささる

わりをこかむとんひと云

和名集云崔禹錫食絰云河

野子 和名美奈俗用 蟻 字非

穀上黒小狭長修入身者也

李自直書

子成さつるまやうんど

らん。ちゆああす。魚道あり。

流とのにして。はれつきたるを

すくやとう作らさし

みかむとんひとふ糸を

らひささる。蟻といふ貝小似

えれといふとあるやんとも

人作られた。ふかといふ

やまうりあり

顔は顔かくらとどろつといふ

ようぬま。幼魚は小流れ

みだん。小流つハ顔かくらとの

ひき。見物の様あうつ

ようぬまや。むらうら

あつらひのりや。さん

かまふあといふへ。灌摩

顔かくら 揚のま也大鏡上

史記の傳よりうつのや

小顔のうらうらあり

家抱候は顔くら海あり

うぬ河うら

幼魚は小流二不祥門 世

寺行志所也

むらうら 平張

灌摩くく 灌摩ハ梵流也

梵焼と龍寸蛇ハキ

云々重言うらハ

あつらひも梵流ハ重

かハ何ハ水の梵流

何ハの水といハ摩針



梵行ありて摩訶大迦葉

ありといへり

注閑寺 東山より谷の辺に

よあり捨林下本云清閑寺

佐伯公行建立

くくといふもさうし修せり

護摩さうあといふあり

法と法の字とすといふ

ころし。濁りといふと清なる僧正修れき。

つよよふともふかかふとのとむか

乃さうりハをむより百

又十日とも。時正のほせり

とつくと。立基より七十五日

附正 彼岸の中日と附正

紫やうくろをよ

遍照寺 兼仕法師。池の名

と日さうりひつきて堂

うらまそくえをゆきて。戸をさうりあきされハ。教

をさうりさうりさうりきり。後をのせもいふて。

たきこめてさうり入つてさうりきりよそをひた

とさうりくくすえきりなど。さうりりさうり入き

てんよつぎくれた。ひらのおのことも。おこアま

遍照寺 捨林云廣澤僧正造

池 廣沢僧正ハ寛朝也ハ

寺後残あり



入て居る。大福也。少きあへる中に法師ま

しやて。うち少勢おちるしきれば法師とと

依廢 檢非遠使、廢也別當所  
らへて。おより依廢へ出

基俊 久我の二門基具の二  
よりくる。ころとおのをもと

くひよりせきせき。禁獄せきればきり。基俊大

納玄別當の時よまん侍守家

太衝 筆談七云六生天十  
月、木可為殺幹故曰太衝

と者日月五星取之門戸

天之衝也

吉平 安倍晴明子吉昌兄也

主計頭陰陽博士年八十五

と云也

相傳の事有たり。とりらう

入道中侍。吉平より自筆

を束向敬ふあり。息ら

と云也

と云也

必云意あり。そのとをきくおおかりくハ益の候

也。世もれ浮説人乃是非。自他れとあふ久れ



かくはささくあ。もとがふお時。うらひれらう。  
そ蓋のふりありとらふも成さうらひ

あつらひ乃人れ却の人よまらりり。交これ人志  
あぶらあふまよゆきてあまそそ。又中寺中あまそまれ  
ぬる秘の僧。さうて家俗はあまそそ。人り

我俗 我風俗也一本は属のま  
とそり我族数まらり

雪仙 貞和集子元雪佛頌  
サケ華摩出一如来六出團の咲  
臉開識得鬪體元是水摩耶  
まらりまらり  
入るれいもあまあへるまこと  
えあよまの白り雪佛と他

官裏子後胎 子元佛光國  
師祖元也又雪達磨雪布袋  
とあつもの雪まそそ像とつ  
らつ也 又張文潛戲作雪獅  
絶句六出粧成百獣王日頭  
出後便身當擔肩掛眼人誰  
怕想汝應無熱肺腸  
獅子を仰りころとそえた

まらり。そまため小金銀珠  
のりまらりといとまも雲霞を  
そそんとすうふ似まらり。そ  
うあへとまらちてま安  
えんや人の命ありとこんら  
とまし下よりきゆうことる

れしころまらりららよいとあままらりこも甚  
あぬまられ 我れまあ  
ぬまらり



乃じしうよのそみて。あれんきこらるあしうのうんかく  
よそふんゆりし物ともしひ。かよもあくること  
れとあれし。あふうろくおがゆるありきぬる  
のうらぶくおがえいあふうやまあおとらあ  
らへさりせんとしひてありあん。我智さとり出て人  
ほのあつもの、牛羊のくぐり  
虎狼狹大のくぐりたるひの  
こくせあり  
にあり。つものふ角あり。かのく角  
さう。かきふせ牙あり。かきのくきさ  
成りし。かきすたらしひあり。人とて。かきあふがうす

物とあしそいさうとと海とす。代よまやううことれあり  
あれたうさ 位あのたうさ  
あり  
あし。かきも。あし。かきのすくれうらよても。かき祖。かきのかまれ  
あし。かきも。人。かきはあし。かきうらよあくる人。かきたし。かきい。かきふ  
かきとせ  
かきもあし。かきえ 鳴呼とあり  
世俗。かきはあし。かきこのあんとま  
かき也  
いひ。かきされ いひ。かきさう。かきあり  
源氏篇木巻光源氏。かきのく  
いひ。かきく。かきいひ。かきされた  
あし。かきふあし。かきうら。かきく。かきいひ。かきこ。かきあし。かき  
あし。かきふあし。かきうら。かきく。かきいひ。かきこ。かきあし。かき  
あし。かきふあし。かきうら。かきく。かきいひ。かきこ。かきあし。かき



まあとうねがうん  
ひびきもまひく。たぐい場まえを

あり。ふるもぬしとよせーあうん。こつーあ

きーかよまねおよまうやくよこつーあ

志常よこつーあ

こつーあ

かゝとーあ。あよおよか

曲礼志不可滿樂不可極

こつーあ

年としをころん。事ことをたれろかのまて。これの

のちよへ。誰たれよろうんあといろく。はむのかうと

よて。こつーあもつーあ。あはは。あはあれと。そつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ

たつーあ



ときぬへくのあしぬへのいひきいふと。まもあ  
らふとあひまうらきいぬら。きりまひ

後醍醐院 人皇八十七代也  
土御門第二皇子

何事此式まじりとらふら。後醍醐

の代までいひえりきりきりきりきり

建礼門院 高倉院女院永子  
也平清盛女也

と人の中侍けんねいんは建礼門院乃

右京大夫 藤原伊行女也平  
資盛よ心を通せり人也

右京大夫。後高麗院の位

の後。又うらはずこしころし紙りよ。せれ式まじり

うらひころしとハあきいふことかきいふ

人のうり 人のとこり

論語子游曰有澹臺滅明者

行不直廷非公事未嘗至於

偃之室也

内ころみあて。人のがり

ゆへようねと也。用あり

てゆらりとも。そとそとあそくゆへへ。久

一々いふら。いとむらう。人とむらひえハ。もそ

むかくももく。むむむ。かも辞あつす。あれと

さうりて時をうらむ。たうひの。あ益あ。いとハ

一きいんも。うら。かつきいん。とあ。んね

ハ。申く。も。も。いひてん。おあ。ゆ。む。ら



たあ一心よむくハまかりく  
我と忘因一き友のまろく  
因よくろりまむむむ

はかりくむりん人のつれく  
よてしはふり。きよハ心静

みあやいんハこれ  
阮籍の青き服 竹林七賢  
の内あり

かきりよハあうさるる  
阮籍の青き服 竹林七賢  
の内あり

晋書阮籍字嗣宗不拘礼教  
能為青白眼對之及嵇喜來  
吊籍作白眼喜不釋而退喜  
弟康聞之乃齎酒挾琴造焉  
籍大悅乃見青眼由是法礼  
之士疾之若讎籍時率意獨  
駕不由徑路車迹所窮輒慟  
突而反

きしめや。まゝのまは人の  
まのそののまの物候して海  
まぬついとあり。又文もく  
くまえさむひハあとなのあ

魏志  
武帝  
公  
孫  
資  
傳  
資  
入  
洛

いひいハむろ。いひいハむろ

貝とありの人の。我まへあるといふをさして。よそとらん

いして。人の性ハくきむさのトまてあそくろ

はよ。あつと人よあがれぬ。うくありの人ハよそ

まてまらあくとろといふえすして。ちうきこんくりお

かよやうまれと。おろくお海あり。碁盤乃はこ

棋盤の角よるよとて

後漢書梁冀傳冀能挽滿彈  
碁注挽滿猶引強也藝經曰  
彈碁兩人對局白黑碁各六

お石をさくくろくふ。サ  
くひまろるをまもりてん



枚先引棋相當更先彈也其  
局以石為之 事文類聚前  
集云魏文帝善彈棊能用手  
巾角時一書生能低頭以  
冠葛巾擲棊

方のうかよひきく 貝と  
かひるをうくくこのま  
あしす 傍のうかよひく  
しつかとぬひをく  
へくす 中庸子曰射有  
似乎君子失諸正鵠反求諸  
其身  
清獻公詞 言行錄後集五趙  
并清獻公字 閑道衢州人  
進士事仁宗英宗神宗官至

くくあさうす。つうまも  
ととくえて。あさうす  
めをすくはさう。せいだて  
いー必あさう。あれさうかお  
むきく。求へう。は。あさう  
ととくし。くまへ。清獻  
公う。とらお。好まう。と  
お種とさう。とあられさう

參政辨韻趙并氣貌清逸人  
不見其喜愠自号知非子為  
侍御史彈劾不避貴勢京師  
号為鉄面御史 皇朝類死三  
十六云馮瀛王詩雖淺述而多  
義理曰窮達皆由命何勞發  
嘆聲但知行好事莫要問前  
程冬去冰須泮春來草自生  
請君觀此理 天道甚分明  
を國必そむく 論語遠人正  
服則修文德以來之既來之  
則安之注内治修然後遠人  
服有不服則修德以來之亦  
不當勤兵於遠  
風よあさう 本草序云真諦  
曰常不能慎事上者自致百

了。世とだもさんみらもか  
ゆん。うらとつじまう。か  
く。きま。あさう。さう  
あさう。を國うあさう。さ  
く。時うあてさう。く。と  
と。む。風よあさう。湿さ  
て。病と邪冥さう。さ。あ  
とらう。さ。う。人ありと。醫書



病之本而怨答於神靈乎當  
風則温反責他人於失覆皆  
癡人也夫慎事上者謂舉動  
之事必皆慎思

その化 徳化也

禹れゆきて 書大禹謨帝曰  
宓禹惟時有苗弗率彼祖征  
禹乃會群后三旬苗民逆命  
益曰惟徳動天無遠弗届禹  
班師振旅帝乃誣敷文徳舞  
于羽于兩階七旬有苗格蔡  
氏傳云三苗國名在江南荆  
揚之間恃險為亂者也

論語曰君乎有  
三戒少之時血氣未定戒之

おいへるうも。司れまへあふ  
人の慈とやめ。恵とかとこ。  
なとこくせえん。そ化也  
とくあうせん。とととくあう  
也。禹のゆきて三苗を征せり  
も。びくまをうへて。地とく  
まへるうきりた  
うらた時ハ血氣肉又あまる。

在色及其壯也血氣方剛戒  
之在亂及其老也血氣既衰  
戒之在得

情欲 七情六欲

九齡議論如下坂走丸  
九齡議論如下坂走丸

公字の門客とあつめて珠  
履とてき飛唱と替ふ一唐  
ハ女卒の銀鞍白千金蠟  
眉を買代類也

若れたをもよかりまふせよ  
百卒の分 白氏文集第四新  
樂府并成引銀瓶云為君一

心物よりこまうて情欲おけ。  
珠とてき飛唱と替ふ一唐  
とふやつきいさめう公あうりふ  
しく物とあうそひ。心よ能う  
や。このびあはくふさう海守。



田恩誤妾百年身

わづらふそとそくわて、年よ  
つてハ精神衰へ氣血涸  
ろく物よ感動とろこ  
すくあ

久みおせり情よめで、行を  
いさきこくして、百年此力を

あやあり命とらしまへるた

めねうつくして、身のおこくむきかかんやと

ハあつたよとせりついでよんをききてあつて世うこいと

もあつ。身とあやまらるへいもろき時れとよき也

むねう人ハ精神おとろへあつくをろそくお

て感しつこくああり。かとのつこくちあうか

終ん。益れよとて我おさす。かたたらとせと終

あ。人のうつくひあうんし我おさす。むき

智れりう記時おまされお事。うつくしてか

ちのむころおまら終ること

玉造と云文 玉造小町子壯  
不野小町うら。きらめてはこ

間徑邊途傍有<sup>二</sup>女人容貌憔悴身體疲瘦云<sup>一</sup>予問女曰汝何人誰家之子  
有父母哉無<sup>二</sup>子孫欽女答予曰吾是<sup>一</sup>個家之守良堂之女。專壯時嬌慢最甚。衰  
愁難猶深云云。 文繁系ゆ

あ。子。かころへうろさ海ハあせこ

いふ文よんえこり。げ文流り

清行 安簡清行欽三若流り  
終と案まろりよ二若清行



まうへき欲せし善相公と  
 云ハ是あり淨藏貴師の父  
 也その文章にも多くは朝文  
 粹一のきり美道の達者  
 也寛平延喜の比れ人あり  
 予野大師 弘法大師之大師  
 附法僧并元亭教書第一  
 伴也

かくりといふ説あきと。高野  
 の大師れ此作の目録よい  
 也。大師ハ兼和れうめふかく  
 世路あり。お町うはううあうこと。其  
 後れともや。おおがううま

お初書にいた大。大智よつうひぬ手ハ。お智よまら  
 くありといふ。大よつきおささううことり。後には  
 也。人事おやうう中よ。道哉ううむより。氣味極

十陽  
 〇

うさひあ。是実の大事也。一は道をやて。こ  
 後よろろさうん人いつ世れまきうすこれきん  
 あふととといとあまん。とろろあう人といふと  
 色。かろきさ大のわううとらんや  
 ちののしせ 孟子離婁上是  
 猶悪酔而強酒  
 うりりき人ものうらうらうは狂  
 人もありて 前漢書蓋饒寛  
 賀許伯入第曰無多酌我我  
 則酒狂丞相魏侯笑曰必公  
 醒而枉何必酒也  
 又酒の美を狂素と云也

世おはんえぬとのおわき也。  
 ともあううとよ。まう酒とす  
 めて。志のませうとと真と  
 すうる。いうあうゆへともんえ



あつらひ返すて頭ウツク宿酒

のさめさうと云 莊子ニ狂醒

三百不巳 晋書劉伶曰天

生刻伶以酒為名一飲丁石

五斗解醒詩文醒酒也

生をへとてさう 死うううわ

うらとさうり

かきさめ 辛勞るるめ也

むとの國 吳一國也

あまうり あつらひノ

むもさうし 茅ヒあひとをむ

ろせのノ也

ぬるぬるノす へとさうさうり

羞明

我ノいりき事 日ノ力ノ也

す。のむ人れハいとさへくさ

は。眉ハをむハあ人めとつらて

とてんハさうハきんとすハあを

さへて。むハきさハめてハとるハ

のませつハきハうハりハきハ人ハも

はらちハちハふハ狂人ハとありてを

こハうハまハくハ息ハ災ハあハうハ人ハも

目ハれハすハへハたハるハれハ病ハ志ハと

あひハうハきハ一 万ハさハう

かハうハとハいハものハうハもハ酒ハのハそ

えハいハるハきハすハるハまハうハてハあハつハし

たハふハあハかハくハいハさハうハハハ酒ハれハそ

えハいハるハきハまハうハにハるハとハさハうハすハ也

漢ハ氏ハこハうハかハいハえハいハるハきハこ

うハのハりハあハいハいハさハうハひハてハ罵

罵ハ喧ハ歎ハ也

白樂天ハ答ハ勸ハ酒ハ詩ハ云ハ莫ハ怪ハ近

來ハ都ハ不ハ飲ハ終ハ廻ハ因ハ醉ハ却ハ沽ハ巾

誰ハ料ハ平ハ生ハ狂ハ酒ハ客ハ如ハ今ハ寔ハ作

酒ハ悲ハ人ハ

つハいハむハらハ 洗ハ地ハさハうハ

えハもハいハえハぬハ事ハ 寔ハあハてハきハ唾

吐ハさハうハのハ類ハ也

百菜ハのハ名ハ 前ハ漢ハ書ハ食ハ貨ハ志ハ夫

あつらひハ前ハ後ハもハさハうハすハたハれ

ゆハとハいハえハふハへハきハ日ハあハとハさハ涉ハ

あハうハりハぬハへハあハつハらハ日ハまハて

頭ハいハくハ抱ハくハらハすハふハいハひハす

生ハをハへハとハてハうハらハやハうハあハくハ

あハるハれハとハあハりハえハすハおハかハやハきハこ

たハくハのハ大ハさハうハとハかハきハてハうハらハ

ひとハあハうハ人ハとハうハてハかハらハめハと

三



益食者之御酒百藥之長也

憂アハ又マすルとクハト 東方朔傳

銷憂者莫若酒 古樂府何

以カ忘シ憂ヲ唯ニ有リ杜康 杜康善

造酒故為酒客

丁チきキりリとクも 詩云憂

心如醉カ又云憂如醉カ

汝の世々 上よいせよハとい

い家又汝の世々云今世は

生酒とのめんあきと也

往生礼讚云恒以瞋慧毒害

火焚燒智慧慈善根

見すうと。無想とあくれい礼き

おもそむりり。かくかくれいめお

あひらん人。ねくはれい行と

あらんや。人の國はれいかく

あひるまると。これれいはれいは

人まよてつて入きてたらんハ

あやしくあきよあえぬ人

一。人の上よて見くろたよれいかれいりし。あひ入れいるはれいは

かやくとらん人も。あまあくれいまれいひのくれいきり。

もえあやくれい急れい不れいしれいゆれいをれいむれいもれいろれいしれいをれい記れいたれいく

くかきて。あれいいれいまれいたれいまれいもれい。あれいはれい人れいもれいあれいあれいえ

す。女れいはれいひれいみれいをれいねれいくれいうれいきれいやれいり。まれいえれいゆれいく

をれい教れいうれいはれいきれいてれい打れいられいひれい。あれいもれいてれいるれいよれいはれいり

つきれい。よれいくれいぬれい人れいされいうれいあれいてれいはれいおれいされいあれいてれい。あれいの

くれいもれいられいひれいたれいられいあれい。あれいまれいたれいくれいまれいりれい出れいてれい者

くれいひれいまれいひれい。年れいむれいられい法れい師れいめれい。あれいまれいたれいてれいくれいあ



くきこひのききかどくこぬきぞ。目もあてらば  
 すちかひらば真まことなる人さうとま〜く  
 一。あつハ又我身わがみらうき事ともう〜く  
 いききくせ。あつハ醉まよまき。下はよれ人ののりあひ  
 びさうひて。あさま〜くおさあし。能くま〜く  
 きさりのもえぞ。さ〜くハゆるさぬ物ともさ〜く  
 て。録えよりおち馬車ばしやよりおちてあやまら〜く  
 物ももの〜ぬきつ。大海うみをのりひゆきて。つ



びち。門の下まよむきぞ。えもいそぬ事ともさ  
 ちりし。年むけさうきさう法師ほしやうのふきれ〜  
 ぞをさへて。夢えぬ事ともひつ。さうめき  
 ころりさうえゆし。かゝもさ〜くもいせも  
 のせも。益ある人きこさあふ〜くハせん。いせよあ  
 やまちおやくたう賊たうさうしあひ病やまをま〜く。百薬やの  
 長ながもふ〜くも。あれ病ハ酒さけよりさうお〜く。さし入いを  
 方かたれ戒かいを破やぶりて。飲酒いんしゆ戒かいを  
 破やぶりて。自餘じよの戒かいをも破やぶり



酒をとりて人々のませたり人  
梵網經心地法門品云是酒  
起罪因縁而菩薩應生一切  
衆生明達慈而更生一切衆  
生顛倒之心者是菩薩波羅  
夷罪又云若佛子故飲酒而  
生酒過失無量若自身手遊  
酒器與人飲酒者五百世無  
手何況自飲亦不得教一切  
人飲及一切衆生飲酒况自  
飲酒若故自飲教人飲者犯  
輕垢罪 孟子離婁下禹惡  
旨酒而好善言注戰國策曰  
儀狄作酒禹飲而甘之曰後  
世必有以酒亡其國者遂疏

ふしうとさどもあひ出てあ  
る。好の世へ人の智恵と  
しあひ善根とやくこと大  
のともくし。悪とまのよ  
ろりの戒を破つて地獄へ  
隨へ。酒をたて人よのま  
せう人。又百生うる。よま  
にまのよ生ふとくう。仏ハ

儀狄而絶旨酒

かゝるまゝとちのたれ  
く控ふるしとけり別後  
やまふなあり今合せ  
て一紙とす

月の夜をたれあゝのど  
陳鴻長恨歌傳驪山雪夜上  
陽花朝 李白月下獨酌詩  
花向一壺酒獨酌無相親  
孟浩然月對影成三人  
又揚誠齋月下傳孟詩鶴林  
正露下乃えり 謝惠連  
雪賦梁王遊放克園乃置  
酒命賓友天寶遺事王元寶  
每大雪掃雪開徑通客飲

從給ふまきかゝるとあり  
やのたれあゝた毒のともふ  
てもかのとくお拘流して  
出らう。よろりの真とそふ  
ふことせ。つとくあつ。あひ  
の介よなれへき。とくりあ



謂之暖寒會 李白宴桃李  
園序興瓊筵而坐花飛羽觴  
而醉月白樂天詩花下忘婦  
因羨景樽前勸醉是春風  
みきちち 沙酒 沐酒 祭  
時如い書也

火よりそのつと 宋垂山夜  
雪詩一炉柴火三盃酒誰記  
山陰有戴逵

我家ハ戸スラ帳をもたたく  
これハ大志きませむにせん  
みさくか子ハあふよりんあハ  
ひさこをとうかせよまん  
ちうつらほりき人の  
房山三受竹林七賢乃類也

あひらうもふあくさむなれ  
くーかうぬあさりのみされ  
うらうりはくさ抱みきあ  
ふれやうあつをさひーてさ  
ーかされらうびこりあせ  
えだあまて火よりて抱りあ  
ーとべらあれたらさむ  
うひてあわくのこころづとれ

か。旅のうらさる時ふあてり

て。成さるれ何れあてりひて。志んれよあてのそた  
あもれう。さうさる人のあてられてすさ  
のみさうも。さうさる人のあてられてすさ  
むとつうへさうさるあもれよあてのそた  
ー。さうさるか。さうさる人のよさうさるさうさる  
終ねうさうさるさうさるさうさるさうさる  
罪ゆつさうさる張安世ハ高官  
の酔てぬとよさうさるさうさる



とゆつし内吉ハ申吏ハ酔テ  
 丞相の車れ上よ吐と酔飽の  
 矢を以て土とどろへく寸  
 とらくつとせ守護まよあ  
 已醉人とな不<sup>い</sup>得とつ身  
 あれとも世教れあよ八丈  
 飲を戒へきも也  
 あさひまろる あさひまろる  
 あり  
 むきあけろろ 元降まを  
 あけろろ也  
 むきちろひて きろ抱きき  
 あまもあむむきけりも  
 ゆ也

積てあきかたうあどあじ  
 のむきあきたうにまよひて  
 わきころろかあろろかろき  
 ともいふさう出。抱もきあ  
 へん。むきまらむきまらひ  
 てよろろろろりすろこれろ  
 しろよ毛ねひろあかろ  
 ろきこのやと。わろろろろろ  
 むきあけろろ 元降まを  
 あけろろ也  
 むきちろひて きろ抱きき  
 あまもあむむきけりも  
 ゆ也

黒戸 清涼殿のあよある澄  
 口戸の西

小松門 光孝天皇<sup>小松</sup>  
 天皇仁明第二皇子也元慶  
 八年二月即位時歳五十四  
 仁和三年崩年五十七  
 むろ人よれりまし時

未即位の時也  
 はさかこと 意也今時の料  
 程にして中食類るる人

三九  
 正月十五日百官各勤を献て  
 足名つらろろ延表式の中根  
 源ろろ時向まろろのわらろ  
 せ給事也

播磨中書王 後醍醐院中

黒戸 小松門位よつろせ給  
 て。着ろろ人よおろまろ時。

まさあろろせさを給と忘た  
 ゆるて。常よいとおませ給

あろ也。みる後本よすき  
 積ん。黒戸とろろ

三九  
 正月十五日百官各勤を献て  
 足名つらろろ延表式の中根  
 源ろろ時向まろろのわらろ  
 せ給事也

播磨中書王よて。後醍醐院中

失

ロ



の皇子宗子親王一系中勢  
卿征夷大將軍お降りまき  
溢余りて將軍より多り給ふ  
中書ハ中勢の意ハ王ハ親  
也

依々木隱岐入道 東鑑四十一

建長二年十二月二十九日

隱岐太郎左衛門入道心願

者依々木隱岐前司義清嫡

男幕府近習也俄出家遁世

訖云々与若狹前司泰村度

争座著上下之由而及喧

嘩故今及此云々

派の云々 晋書陶侃嘗造船

其木屑亦頭皆令籍而掌之

其後元會大雪始晴願事前

あふ。あつりて故いままの海の

かんくさりきれん。いくせんや

はこありきろふ。依々木隱岐入

道。のこきりれろのど車より

まて。おかくまひくさりきれん。

一應よ志うれて涙去のより

らひあつりきり。とりためせん

用念。ありりくさると人感

猶温於是。以取掌木屑布地

蕭服之題。陶侃詩曰。致力中

原。無事亦頭木屑是。功名

吉田中納言。藤房欽万里小

路を吉田とも号すなり也

あへりさうり。け事とあるもの

れくさりかたろも。小。吉田中

納言の。うんたすおこの用念

やうりきりとの。かひさうりし。さうり。かりき。

いさうとあひきり。のこきり。あさうり。や。くも

やうれ事也。なれ後と。まひさうり。人。くさり。お

こも。あうり。くさ。故実也。と。お

実紐。ゆれ。承。れ。て。あ。り。く。時

内侍。西。へ。の。事。あ。る。ま。と。き

或。西。へ。の。事。あ。る。ま。と。き。内。侍。西。へ。の。事。あ。る。ま。と。き



そくをくも人子ゆい八畫の  
 少座れい海也それとあり  
 として寢ぬくと云々あり也寢ぬハ三種の袈裟のうら也むの所寢を  
 清涼殿あり 別殿 内侍司尚侍ニ入典侍ハ人掌侍に人あり供奉  
 奏後宣傳のふと司あり也  
 禁秘抄云典侍の職が重為  
 少乳母之人老佐大夫女御  
 之云々案少御ニワあり宰  
 劍と袈裟とハ常々ハ夜ハ  
 の少座中少物の上ハ安置  
 是壽永の乱ハ室劍ハ海の  
 代ハ清涼殿の所劍を用ふ  
 是畫少座の所也

御系と見え人よかると見え  
 寢ぬとハそくももちらるる  
 ろといふとききてごらるる女  
 房れあふ別殿の初夢又  
 畫少座の所劍よてこうあれ  
 と志のひやうふいひとて  
 是はせり

公少かりき。うれ人少典侍ありきるとありや。

入宋 支那へまゝくうふ座の  
 せまれん入座といひ宋元  
 の時をきき入宋入元と云  
 あり

又兼乃沙門道眼上人一  
 切經法持来して云波羅

道眼上人 道元と云人あれ  
 と別人さうへ道元越前  
 永平寺の開山とて日本曹  
 洞宗の始也教書云道元建  
 長五年八月死給ハ兼好あり  
 前代の人也ハ道眼を兼好  
 同内也ハ兼子の末ハ兼ぬ  
 那蘭寺よりて道眼の後ハ  
 後と云ふことあり 一切經 大藏經也ハ千餘卷と七千餘卷との多  
 少あり 首楞嚴經 十卷あり 那蘭陀寺 揚處經と中印度那蘭  
 陀大道場陸とあり也疏云那蘭陀此云無厭忌竜名也 西域記云菴波  
 羅國有池池中有竜名施無厭寺近彼池故以標號 江師 大江匡房卿也

のあつたりやまきと見え  
 り安曇して。もと首楞  
 嚴經を傳して。那蘭陀  
 寺を考す。そを空のヤハ



大宰師なる故に江州と云  
江次亦江後多と云書も皆  
匡房作也そのあつて口  
きくもの故に世に出る  
たりもの云々初も江州の字  
也と云ふるにせり 匡衡  
本因 成衡 匡房正二在  
推中納言嬖者

西域傳 女井三秀天竺へ  
アその記録十二卷あり西  
域記とあつて

法顯傳 法顯三途後天の記  
録也上卷より下巻まで

西明寺 唐の法相宗沙門  
因測の居る寺也因測を  
窺基の弟子基は玄奘の弟

子也白氏文集にも西明寺  
牡丹の詩あり

けきちやう 三毬打三毬杖  
爆升 尤長 如比者  
あまのあつたり 頭服 神中  
抄十云十節録黄帝取蚩尤  
頭毬之今毬杖是也 以彼例  
漢土年始用件事國中無  
事仍日本國學其例年始打  
毬杖然則毬杖 王冠 春と云  
事文類聚 爆升 神異經 西方深山中 有人長尺餘 狂久則病 寒熱 名曰山驢 人以  
竹著火中 焯焯有聲 而山臊驚 憚歲時記 爆升 燃草 起於庭燎 法也 考考  
爆升 八除夜と元日とよまはるる也 上元とあつす 上元は漢武帝の太じが  
祭ふは昏時より夜のあつるまでと云ふ事ありて 燃焼の事

積一寺。那蘭陀寺ハ大門  
小むき也と。江州の院也  
ていひつゝへこれと西域傳  
法顯傳もあつてもあつても  
小見承あり。江州をいうか  
ふ。おかづりあり。唐去の西  
明寺も小むきあり

中ノ表

けきちやうハ正月よりちやう  
きちやうと云ふ院より袂泉  
苑へ出て。焼あつるあり。法  
成統の記よりと云ふやと云ふ  
袂泉苑の記よりあり



あり又天竺テンシクも正月十日僧徒ありまると燃をりし仏舍利をとりて  
 何れ爆弁のりあり日中のけきちちち僧家よりひけり八漢明帝の時  
 一めて天竺あり仏法をりて五嶽乃道士をやらんと初よりりてを  
 ありと人として仏經をたよき道士の書とちよきとて火をかくるも  
 士の虫ムシ焼失すされんたの書とせりとてた書と云又西域美長や東  
 土やとんやん西域佛法代書はさりて東土へ流布せると云り也ともい  
 是ハ沙門の書とせりことされん我をを巻くもさるへりけり正月  
 たるきりやうとあきハ神中抄乃況は月一けりといふ事也

真言院

拾芥云在八省北僧經人侯勤修佛法念誦等

神泉苑

拾芥云天

子遊覽可以近衛次將為別當乾臨閣謂之正殿金置墨石二條南大宮西八町  
 三條北土生東善女竜王常見此所上代別別者有公當長保年中道綱補之

二ゆき

附女ハ香を塩よた

と香山ハ香を玉屑よ比  
 一王勉ハ香を豆粉灰よた

あれくこ書だんえけこゆき  
 とりふ事よぬつきあつひた

とつためあれん珠パール  
 ともくろくとともあつ

あふ似れん彩書といふ  
 たまれこ書といふへきとあ

かきや本乃まと 牆垣樹木

の岐也  
 積波ツキナミをけり月北 三巻あり

やまろそえんものときいふ

やかきや本れあこいもとうさへとある物

ちりやきさびうらりひきりさるや鳥羽院

れさあかりさる。雪の積よかく作れきり

り。積波乃すけり日記を書り

隆親 四糸隆季 隆房 隆術

隆親 權大納言正一

隆親 二位檢別當  
 四糸大納言隆親にがさけ



かろまけ 干鮭とす 和名

云雀禹錫食經云鮭 折青反

介介案俗用鮭字非也 其子

似苺 覆盆也見唐韻

赤光一名年魚春生年中死

故名之 九魚とせふ

切かろまけと云申よつぬき

ころを鮑魚と云鮑魚とも

法魚とも云塩よつきたる

鮭魚鮭魚鮭魚と云本草細目あり

久元年十月十三日頼朝於遠江國菊河佐木三郎盛細相副小刀於鮭楚割

居折以字息小童送進御宿用云只今削之令食之趣氣味頗懇切早可聞食飲

云 殊御自愛彼折敷被添御自筆曰

よりまけとあり心さうか

といふ物と供沙ふ事とせ  
獲りきる成かくあや一此  
物まいつやうあ〜と人志  
りきると夢て大破と鮭と  
いふ魚まいつぬきよてあん  
鮭乃ま〜り 東鑑第十建  
和名云鮭魚一名鮭魚 和名  
楊氏漢語抄云銀 春生冬死故名年魚宗廟と尋る 燗魚曰商祭 鮮魚曰股祭  
日英入云細鱗魚

や曲礼子思之より 稽魚鼈以為夏禱助生阜也と云乃古乃訓也と國語

又えより 鮭も鮭とむ〜りあり 莫まれ〜り 竹中子まいつへきもの

又本草綱目と云る子 鮭魚ハさけ也 鮭魚ハあめ也 今和名集子云と云る

鮭と鮭とせよ久〜かき 傳子ゆ〜と云る〜く引用子也

ふ〜あれさげのま〜り 何条も〜かあ〜

鮭のま〜り ハま〜ぬ〜と〜されきり

人流〜牛とハ角ときり。今

娘馬とハ耳ときり。そ〜

と〜しとつきり。人

や〜せぬ。ハぬ〜れと〜あり。

是等とあり律の禁也 曲  
礼 載鳥者佛其首畜鳥則勿  
佛也 注佛謂披轉其首恐其  
喙之害人也 畜者不熟須其  
性也 又曰效馬效羊者右牽  
之效犬者左牽之 注效陳獻  
也 以右手牽之為便天以左  
手防其齧噬 事文類聚云

夫是...



度疑道世不仕牛馬有跣鬻者恐傷又不鬻於市周書西旅貢敷太保乃作旅敷用訓于王曰犬馬非其土性不畜豈會前默不畜于國注禁犬高四尺能知人心可使者猛而擣入者異於常犬律廢救曰九馬半及大有鬻能踢咬人而記鬻捨數不知法者有狂犬不殺者答四十疏云依雜令畜產能入者截兩角踰入者絆足鬻入者截兩耳此為標鬻鬻絆之法

らひ。是之れとあり。律のいあめあり

時頼 因來乃執權正五位下相摸守号最明守法名道崇

相摸守時頼の母ハ松下禪尼

くハ〜東鑑元亨紀書

平時政義時恭時時次

松下禪尼 東鑑四十四歳長六年十月六日相州室産安

とそ中きつ。守とれ中さつと事あるふ。さうけつとありアらりしのやめれつと。

子加持若宮僧正隆辨驗者、清尊僧都也奥州女房松下禪尼相州等群集為安東左衛門光成奉行有禄物等銀一匁五依馬置云云

相摸守を後待せらつ也せつとの城介義景 せつこハ兄弟也禪尼と義景と兄弟也秋田城介義景と也東鑑は詳ありあめい 遊仙窟の八嬖嬖、書とまてハ後宮と云へ夕歌巻子きあめいとあつと添流歌集は歌合とありつやまひとつとあき也

禪尼はつとふ刀してきりまうつとれきれん。せつとの城介義景。その目れきいめいしてのきつと。新とつとあふり。男にさつせひん。さやれ事よゆつとつと。作とつとれきつと。男に尾うゆつとつと。



とて。於一百つとて。これきつと。義氣をれど。う  
久らりんま。うらふたや。はくは。一。ま。う。お  
作も。え。ら。う。く。や。と。か。さ。ひ。て。か。さ。し。な。ま。し。ま。さ。  
尼色。後。き。て。さ。さ。く。と。さ。う。人。と。お。ま。ん。と  
も。き。お。ら。う。ら。い。は。さ。さ。と。か。く。て。あ。お。な。ま。さ。さ。り。

抱ハやまきころの西 貞永式目  
小破之時且加修理  
ハ恭時之法改也彼孫尼かや  
のこみと足突一か人の怒  
くて是祖の風と時れより  
へちめす也

抱ハ破らう。西。う。ら。う。を。修。理。  
て。用。か。事。を。と。ら。う。人。お  
え。さ。う。せ。て。お。つ。き。ん。た。め。お

儉約をこくとす 論語子曰  
以約失之者鮮矣又曰奢則  
不孫儉則固與其不孫也寧  
固何晏集解云奢奢從約謂  
之儉

己。と。や。さ。れ。き。う。い。と。あ。り。か  
た。う。り。き。う。と。世。を。た。さ。む。う。道  
儉。約。と。こ。と。く。い。女。姓。お。後

とも聖人の心おうより。天下をたのむか。その人  
と。よ。お。て。こ。と。れ。き。う。後。お。き。く。人。お。は。あ。う。さ  
つ。な。あ。つ。と。お。し

おんれ 故陸奥守泰盛ハ。は。う。ま。れ。馬。系。あり。き。り。馬  
と。ひ。き。出。さ。せ。き。教。よ。あ。う。と。そ。ろ。る。て。さ。き



志まみ 圃と毬とをまきり

みよふらふとてのつとみんて

き。是はいさめう馬ありとて。鞍とをまきうくさる

きり。又あまのへく。志まみみおけあてぬまき

是はまふらてあわちちあうへくとて。のへく

つとまきり。道とまきりん人かえりり世あまて

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

志圃のまきりまきりやむる馬とまきりまきり物あり人

れ力あまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへく

よへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへく

くまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへく

まきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへく

まきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへく

まきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへく

まきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへく

まきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへくまきりへく

不堪 其器量也  
非家 其家よあつさる へり



とろろあて 聖門をても  
曾子魯施ロビシして篤実トクジツあれ  
ハつおよ一貫の信とえころ  
先きとも真れ下悪ハ悪ハ  
へて善よ入するカクキツク葉付ハツキ  
悪も畢竟ウキキツハ下愚カク至極シゴク也  
たつみくして 蘇秦張儀ソウシン  
揣摩サウマの法ハフくみあうさう  
みあうすれおれころい  
つりりひまをさうゆん  
よ果カクて災難サイナンはかきり

乃振衆ノ心つらひもどろろふくつらつらめり也  
得トクの申ウケ也たくとめてかきまのあつハ災サイれ申ウケ也

といへとも堪依カンの托家トクカの人  
よあふぬ時トキあつれまもさう事  
ハだゆとあつて一えころ  
くくきぬとひとく入り自  
由ユあつとのむと一かふぬ也ケ  
張チヤウ和ワ化カのともあつぬおやこ  
のうまよさ

或ウチ老ロウ子シと法師ホフシよあつてガク学ガク問モンしてニガク因果ニガクの理ニガクとニガク  
世セはらうニガクきニガクころまき  
説セツ種シュとして世セはらうたつきた  
ぬよりあり

せよとつひされハど人のまは説種セツシュ師シよあつたためふ  
先マふよまあふひより輿車ウクルマもニガクぬ方のニガク導師トシよ徳トク  
せうせんと時馬ウマあつむく人ヒトよまこせつらんよりのさり  
おておちあんまふころころ人ヒトとさひひより次ツギよ仏  
事のぬ酒サケあつすむじふとあつんよ法師ホフシのま下  
よ張チヤウあきハ檀那ダンナすまよころあふへ一ヒトくまマあ



早秋 今のゆふれれるる

一又林樂信言系の中に

もよきあり

とくふもよきあり。あさ  
 のしるし。あさひの  
 けしほ。いよへくもよき  
 へ。あえて。たしあみき  
 けふ。悦強あへくもよき  
 け法師の。あめあはれ。あ  
 程。強あへくもよき。あ  
 結もよき。あめあはれ。あ  
 しくもよき。あめあはれ。あ

たりつ。あまき。あめあはれ。あ  
 せ。あめあはれ。あめあはれ。あ  
 せむね。あめあはれ。あめあはれ。あ  
 力もよき。あめあはれ。あめあはれ。あ  
 改とく。あめあはれ。あめあはれ。あ  
 傳聞。あめあはれ。あめあはれ。あ  
 棹。あめあはれ。あめあはれ。あ

ひひあ。あめあはれ。あめあはれ。あ  
 へく。あめあはれ。あめあはれ。あ

大藏







貝成さくねとあおハ。あらの事ハ。くつとて又くつとて  
 くのめとよみ故よ。一時の懐急ケダすおつら。一生の懐急  
 がある。是とをさるるへ。一事でうあつたまさとと思  
 へ。他乃るこれ破やぶあつとていふへうす。人の衆あつらと  
 色能へうす。系あつたへうてハ。一の大事おつあへうへ  
 人のあまゝありあつ申。あつものまのたはてした。  
 鳥のすまき。このすまき  
 同し海。そあまのゆり海  
 すかめすまきまそたれす  
 きはまのすまきとて  
 ままがたれとてきまといふとあり。  
 わの人の金かねけしとてうへへあつ

原ハ侍也。ますか乃すまき  
 とりの八穂やぶたれて一尺をり  
 王ありとて彼まのくこ  
 とハ万葉集は十寸のた見  
 とかきつとて心えへ。海を  
 かの侍とてハ其麻の心也  
 あれ後於胡臣のまよま  
 てゆり海をがれあをり  
 つまてと信とてまのこの  
 ころれとてやう也ますう  
 乃侍とてまよますう  
 也とりの心也。海をいふれと  
 是とてとりの心とてまの  
 と異一とて也。又海まの  
 乃まるとて  
 越前ふふま濱  
 西行

たりと。さうくつりきうと。登のぼり法  
 師しを。座ざはゆりきううきして。  
 ぬのかりきうよ。みのうまあつ  
 へ。流ながへ彼流ながれとてあつひよ。あ  
 くの人のむつとれくも尋まうん。  
 とつひううと。あまのりは物さへじ。  
 ぬやうとてと人のいひもれ。  
 雲下くもれるもも作らうと。地ちの人の



志乃乃んまふ此小真ひふも  
ののいんといひつふやあつん

御花よ

登喜法師

世の人の心ゆくきくもふ  
そつうくれすりまのめも

敏則有功 論評陽貨篇

一大事因縁 法華經云世尊  
唯以二大事因縁故出現於

世

乃命ハ由れんをましまつを

のう。我も志よひのいもらせ

かんだつひきいてんやきてり

ア出くゆきつ。あひひつりよ

たりとせつうううゆしく

まうたふおゆき。敏とまハ則功ありとを備候といふ文

おもつうあつ。びすくきひひうくあひきつあう。一太

事因縁とすねまふへうりなきま

人事  
○

今日ハ人事とあんと思へと。あねいさきいん

待人を 歌侯挽不來謝令推 不妄 来て。まきれらば。まうりん

りありて。たのめね人ハきくり。たのみつらあれて

といたくひて。あひまねるをりんあひね。まうりん

りつう事ハとあて。あひまねるをりんあひね。まうりん

あ。いとふるひさ。あひまねるをりんあひね。まうりん

乃らちもかくれと。一生乃ちも又志うあり。かね

れあうあ。これたうひゆ。あひまねるをりんあひね。まうりん















一文字の法師。晴徳は後師。たゞひよつたりて  
 どのせは志うはと思へ。あつともあつともはをのまの  
 院男はあつたり。あつともあつともは。是地すへうは  
 達人乃人ぞとる眼。賈誼膽。達人乃人ぞとる眼。はとるも  
 あやまうあまへうは。たとへは  
 注通 作達

或人のあまもさうさかまへ出て。人ぞとる事  
 あつらん。すおかりは後と思ひて。あまもよまらら  
 あまうはあまもさうさかまへ出て。人ぞとる事  
 一犬吠形 万犬吠聲 一犬傳

一犬傳 實あつらうまの  
 乃仏林の奇蹟を以ては跡より  
 又何ともおととて  
 又いさう受承あく 抗の  
 氷ときくうや 疑而未決  
 之人也  
 つらあつおほえて。たのびよもあつす。たれあつすも  
 あつて。業一ぬさう人あつす。まよはしうくハ  
 ゆえぬもも。人のいふ事あれはもあつん。さしてや  
 又さうくは推し 不知  
 之為知之の論馬而色哉  
 ぬう人もあつ。又さうくは推し心







中庸曰治國其齊宗諸事

久我内大臣 通基也也也  
此八神妙よおのりて今  
辰の辰ハ九ちうひう新と  
又えこり

地蔵を田の中此もよと  
つと心けうくくくくくくく  
あまねくまきりといひ人  
久我内大臣教よてりかりきりよのつひよかり海  
さる時ハ神妙よやんといまきり人よかりきり

あまねくまきりといひ人  
久我内大臣教よてりかりきりよのつひよかり海  
さる時ハ神妙よやんといまきり人よかりきり

久我内大臣教よてりかりきりよのつひよかり海  
さる時ハ神妙よやんといまきり人よかりきり

東大寺乃神典と内裏へあつ時  
を向東寺よ置也

東寺乃若多  
此殿 上乃以此久我内大臣  
けいことをもりゆきり 隠声在  
河海又唱道前所警蹕  
ささこい急やま言つ八阿時れ  
二字のあひあつとま

大沙門相國 定安公也久我  
の庶流

登鼻 前漢列傳十七梁孝主  
得賜天子旌旗從千乘五騎  
出擁警入言趣注師古曰警  
者戒肅也趣止行人也言留  
入者互文耳出亦有趣 漢  
儀注皇帝輦動左右侍帷帳

らへいよへまよまあつは

或人久我繩手とと成つとま  
小神よ大はきくう人よつうれ

念此よあつひき

持衣の男二三人出きり

いおきり

いおきり

いおきり

いおきり

東大寺の神典東寺若多

よるは海陸の時源氏れら  
らきりうよび教大つて  
をいれりると去西門お國社歌  
て教蹕いりけりへんんそや  
ささくれハ時方の振舞ま  
はの家うあつ事よひとんり  
くく入法りりさくけり作ら

らきりうよび教大つて

をいれりると去西門お國社歌

て教蹕いりけりへんんそや

ささくれハ時方の振舞ま

はの家うあつ事よひとんり

くく入法りりさくけり作ら



者稱登言殿則傳蹕止入道也 韻會蹕本作蹕

匠身のつらまひ 大将のつらまひ

小山抄 公任の作也 一冊

小野抄とあり 小野の抄と 西多乃伝 西多乃伝ハ西多乃伝大

良乃明の作なり

定額 續日本紀文武天皇十

寶元年八月皇親年滿者不 論官不皆入賜祿之額

弘仁女曰大政官府禁斷京

職畿内諸國私作伽藍事右奉勅定額諸寺其數有限私管作先既立副此來所

きつらびお國小山抄と云く西文  
の條と云くねりきん養  
廣此西鬼惡社とおそく故  
社社と云くはよききをよへま  
と云りありと云傳られき  
徳寺乃傳れと云もあつて定額の  
女孺といふ事 延喜式に云く  
十八史畧第七元以耶律楚材言始

定天下賦稅上田每畝稅三升中田二升半下田一升水田一畝五升商稅三十  
分之一五斗出絲一竹以給諸王功臣湯沐之賜塩每銀一兩四十竹永為定額  
み多給のささまりと云く定額といふ也唐志に出たり 女孺 禁秘抄  
云近代不著衣尺小袖唐衣也以左道交御調度觸手上下格于奉任是藏人等  
如在不當故也御所中掃除指油役女孺所知也 延喜式 五十卷あり延  
長年中古木片忠平勅をうきて博士ともをあつめて是を撰と

十へて救ささまりと云く人の通号より指

揚名分 源氏三ヶの大事也

揚名殿 愛領よ法園乃守介

椽目乃これとあり 職原

みんえと云り

政事要畧 百三十卷あり 惟宗亮撰記公務交替雜事主要臨時雜事等

行宣法平 坂本れおあり

と云ふる居住せし

撰川乃行宣法平なり

未定卷目



律呂 或人のゆく目八まで

やううある事也律ハ

てこハきま也唐人の音ハ和みてきてマケクノルハ乃人此云律也  
漢濁ありつよきつよきとゆり是律呂のふ日也といり呂律ハ陰陽也

和國をて單律の國として是れをありとヤキ

河竹 六百番定家公の号

河竹乃多ひく景風よ奉重

二世北佛のゆゑをきくハ

清海 禁庭の清也 唐于格

得御溝紅葉題詩

仁壽殿 浴衣ニ南殿北九間

四面

西域記九云如來像也 唐五十  
平多居冥鷲山廣説法摩訶

鈔本卷四

唐ハ八景の國也律の音あり

呉竹ハ景をうく河弁ハ景ハ

ろくハ清よりきハ河弁 仁

多敬のありよりて陸らん

ころハ呉竹あり

退凡下系乃卒都波安あり

退凡下系乃卒都波安あり

陀國煩婆沙羅王為周法故與敬人徒自山麓至峯巒跨谷凌巖編石為階廣十餘  
歩長五六十里中路有二卒都婆一謂下乘即王至此徒行以進一謂退凡即簡凡人  
不令同往其山頂 下乘玉乃車馬ありのりつて我也そよあり卒波婆と下  
乘ハ山下ありゆゑよあり退凡ハ山中ありあり

下系内ありハ退凡也

十月と律呂月といひハ律事

とハかへきよりハ志じたる地也

れと文をもんは 但南月法律の

祭ありき故よげありあり。月

邪月 貞治乃比藤沢山葉  
門由阿々万葉集の注と  
て詞林采葉抄とありてその  
第六る云一天下乃律呂月  
と云ふ事あるは邪月と  
と邪月ともヤ也我々の法  
律ありありありありあり  
也その律呂のくは律くまは  
まはの対小童はくまはのくまは  
まはのくまはのくまはのくまは  
まはのくまはのくまはのくまは

夫是卷四







とくまへあつり日中紀第一  
よりえへり今よりうま  
あつり又藤原の天孫子人  
まのりて木餅あつりけ  
てあやまのそき出行の  
首途といふいとあま  
も遺法あつり

看督長 職原去檢非違使  
使廳本取乃當使補看督長  
初貞願也  
六十六人此為遣諸國也

犯人 罪をたぐせり人也  
和名云唐令云管音  
和名之 大頭二分小頭一分  
又云杖音杖和皆削  
分半

よゆき代時祢といふも。鞆き  
まのりきり祢也。看督長  
負つりゆきを。その家よりき  
とぬれ人出つりす。比事を  
えてのら。今乃世ま封とつ  
あつりおありよりり

犯人と志もとまへり時ハ拵  
おのせりゆひつりあり拵  
は

去節目長三尺五寸許  
拵器 手拵拵音老切打也

大竹勸請乃起後 元亨釋書  
釋良源始木津氏近所淺井  
郡人也延喜十二年九月三  
日生享十二上穀山師事理  
山延長六年丸尊意登壇受  
戒云云康保三年八月補天  
台座至領山務者二十年天  
元四年為大僧正兼法務聽  
日唱弥陀而滅年七十四賜  
山門みはをて云云大竹と云  
法曹 明法家といふ法曹とい  
一のあつり法曹至要執とい  
へるまとあり 職原

扱もよする作法をいふり  
へあつり人ありとせ  
比穀山よ。大竹勸請乃起後  
るハ慈恵傳正と云ふ所  
あり。起法文といふ事。法曹  
は







靈則不矣人以為怪則怪不  
以為怪則不怪伊川尊人官  
麻多妖或報曰鬼報故其母  
曰把槌与之或報曰鬼打扇  
其母曰作熟故耳後遂無妖  
只是主者不為之動便自無  
了細觀左氏所謂妖由人興  
一語說得極出明道石佛故  
光之事亦然

啓罪乃官人 章兼を以す  
韻會冠鳥光切跛曲脛也或  
作屈亦作偃荀子賤之如偃  
注廢疾之人 ちんれハ辱罵ハ  
りやーくくもるき羨也

あやーとてあやーしまさろ  
千金方黃帝雜忌咒曰見怪

まよか別あり。是あまきんとい  
くへのわくさるん。健弱の友人。  
たはく出は乃微びぎまをさる人  
きやうあーとて。まよかまにん  
してやうりきりてこをハカ  
られまきり。あへて凶事ケラドまうりせ  
ふとあん。あやーとてみてあや  
ーはさう時ハあやーみるるり

玉性其性自壞

龜山殿  
ちんれらる 舊の字也久

ちんれらる 舊の字也久

びおとー 前段の突基也  
まよかまにん虫  
ちんれらる大志乃國まにん  
いほくくおよれやとーまよか  
鬼性ハよとーあや

俗は鬼性ハ横道ありといふ  
左傳神聰明正直  
而壹者也蛇のくまよか  
とあり吉兆をよめまよか  
マ找野マ祥也

てやふあといつり  
龜山殿そらまんとて。地をい  
りれきろよ。大きまうくらるハ殺  
とあにありあつまうりころ塚  
まきり。びあのみまありといひて  
まよかのまよかきれん。いんあ  
へきと勅ちくありきろよ。あま  
よりこれ地をよめころ地あり



ん。何うあく。堀さへら。おろし。と。器人。や。さ。れ。き。  
る。よ。び。お。と。く。一。人。ま。ち。よ。さ。し。ん。虫。を。宿。と。さ。ら。ま。ん。  
お。何。ま。た。し。と。さ。り。ま。す。へ。き。鬼。神。ハ。邪。あ。し。と。り。む。  
へ。く。し。た。し。れ。堀。控。へ。と。中。さ。れ。り。き。れ。ハ。  
塚。と。ら。り。て。蛇。と。ハ。大。井。川。よ。ま。り。て。り。又。  
よ。く。と。ま。り。り。ま。り。り。

纏。文。ま。の。細。と。ゆ。ふ。よ。よ。下。より。た。ま。ま。に。ち。う。へ。  
二。と。ら。れ。申。より。こ。ま。の。り。ら。さ。よ。い。ち。は。ぬ。よ。し。き。

出。は。り。ハ。つ。ひ。の。事。也。お。う。に。あ。る。と。ハ。花。嚴。院。弘。  
きんじんこうごう

孫。僧。と。ま。り。あ。ま。ま。せ。り。き。ハ。け。は。や。う。の。り。  
や。い。と。ま。り。う。の。り。く。た。く。く。と。ま。り。て。よ。

より。下。へ。こ。ま。の。ま。れ。と。ま。り。と。や。ま。れ。り。  
ア。さ。る。ま。り。あ。ま。り。か。や。れ。り。あ。ま。り。人。よ。ま。り。何。り。

世説新語補十二云鍾毓兄弟小時值父晝寢目共偷服藥酒其父時覺且託寢以觀之毓拜而後飲會而不拜既而問毓何以拜毓曰酒以成礼不敢不拜又問會何以不

乃。田。を。備。と。う。も。の。う。こ。ま。  
ま。ま。り。ぬ。こ。さ。お。を。田。と。り。  
て。と。れ。と。く。人。と。つ。り。き。



拜會日偷本非礼所以不拜  
異本云孔父奉有三子大者  
六歲小者五歲晝日父眠床  
頭盜酒飲之太兒謂曰何以  
不拜答曰偷那得行礼

んがりのものとも。もゑもゑももがう人きことりりみり  
ハ僻みせんとも。まうろ若あれた。いつくさうかうさ  
とろひきる。ことりりいれり。うろさきり  
喚子鳥 古今集三鳥の其一  
也相傳多くハ難知之  
招魂法 楚辭注曰招魂者宋  
玉之所作也古者人死則使

人以其上服升屋履危北面  
而號曰皋某復遂以其衣三  
招之乃下以覆尸下略之  
人々まればさう時まゝの  
久む秘法也云云宗より也  
招會以手曰招以言曰招  
鶴 鶴ともしもり 和名云  
唐韻云鶴音空漢語性鳥也  
海篇云鶴音夜鳥名

戸後之のあつさ。ま目のあつさ。きりり。鶴も  
嘆子鳥れ。とさうり。通さきりり  
いさひありとて 威勢あり  
也秦の始皇の類あり  
夫道天日

さうにさうせさものほ  
あつ言書れ中によめて  
多き時。招魂の法を  
たさふ次あり。是を鶴  
あり。万葉集乃長あ  
めえり

夫道天日



三路柔者徳也剛者賊也  
又曰威多則身蹶

阿房の鼎鑪王  
石金塊珠磔も子羽一炬以  
驪山三月の紅也

莊子曰孔子再  
逐於魯窮於齊伐樹於宋困  
於陳蔡不容身於天下

孔子も時ありて  
不行乘桴浮於海云云

徳ありとて 道徳也  
顔回不幸ありき 論語顔回  
不幸短命而死

史記の韓非傳  
小衛弥子瑕も之の車よけ  
是地の餘も之よきも寸電

とろろあつ人き少く物と

れむゆへにうろこいふこと

ありいきわひありとてたの

ひへうろこころき物せんがろ

ぬ。賦わつとてれむへうろこ

時のふに失ひひやとて。女あり

とてれむへうろこ孔子も時

よあえん。海ありとてこのひ

愛妻して二多スあり罪也  
とて殊せりとぬ又楊子妃

鬼も多しり

奴もさうつりとして 彭寵  
梁冀、柳之權 張之定り

やのこれしときすくまか  
らす

人の志も

九士卒心と妻して敵とる  
てみんたとつり古今甚

多一朋友の存も又ゆり

張耳陳餘刎頭の交とむす  
ひーくも怨教とありて  
張耳韓信と曰く陳餘を殺

へうろこ。顔回も不幸ありん

えの寵とをれむへうろこ

殊とろろ事すもや也。故

志さうつりとして嘆むへうろこ

そむきとてあつとあり。人の志

もれむへうろこ。必愛す。物

成をれむへうろこ。信あり事

すくま。所もむ人ともれま



寸又朋友の道始終と有り  
論と他ア了刻孝標度は交痛  
と他系

是より時ハよろこひ非ある時  
ハよろこみ 比二句連続と云  
何あり是より時ハよろこ  
とす非ある時ハよろこみ  
多あり 山谷作東坡贊曰  
其愛之也引之上西掖奎坡  
是亦一東坡非亦一東坡其  
惡之也投之於鯢鯨之波是  
亦一東坡非亦一東坡云  
たむむろくせんさうくす前は  
孟子ハ

さきハ是より時ハよろこひ也  
お時ハよろこむはたむむろく  
はさうすお後とをきれんぬ  
さうくはせんき時を刻し  
くく心と刻お事すに記  
おてきひ一き時ハ物よあり  
ひあさひひやありゆるく  
やうらまう時ハ一毛を換お人

世々之時也 莊子天道篇輪  
扁曰徐則甘而不固疾則苦  
而不入不徐不疾得之手而應於心  
拔一毛而利天下不為也 列子曰楊朱曰古之人損一毫利天下不與也人  
不損一毫天下治矣 人ハ天地の靈也 問書泰誓惟天地萬物父母惟人  
萬物之靈秦氏傳云天地者萬物之父母也萬物之生惟人得其秀而靈具四端  
備萬善知覺獨異於物而聖人又得其最秀而最靈者 孝經曰天地之性人為  
貴 孔安國傳云九生天地之間會氣之類人最其貴者也 天比ハかき  
ある 宋陸子靜曰宇宙吾分内事 又曰天地何所窮 又曰東西海聖人  
同此心同此理南北海聖人亦同 又曰人在無窮之事 喜怒是よりハ  
らす 論語曰顔回不仕怒程子曰顔子怒在物不在己故不仕 又曰喜怒在  
事則理之當喜怒者也不在血氣則不仕若舜之誅四凶也可怒在彼已何與事  
如鑑之照物妍媸在彼隨  
物應之而已何過之有

天地の靈也。天地ハうきさ  
一毛も換せず 孟子曰楊子取為我  
損一毫利天下不與也人

孟子曰楊子取為我  
損一毫利天下不與也人

人の性あんそあ  
らん寛大あてきまう



歐陽詹タシ詠月詩序月之為詠冬  
 則繁霜ラ大寒夏則蒸雲ラ太熱雲  
 蔽月ラ霜侵入蔽與侵俱ラ害ラ詠秋  
 之於時ラ後夏先冬ラ八月於秋季  
 始孟終十五於夜又月之中ラ始  
 於天道則寒暑均取於月數則  
 蟾兔ラ圓況埃壘不流ラ太空悠々  
 蟬娟徘徊搏華上ラ停昇東林入  
 西樓肌膚與之疎涼神氣與之  
 清冷ラ

金木抄四  
 三二  
 予時ラ喜怒ラ是ラ又ラさラりラくラはラり  
 てラそのラためラ又ラさラりラくラはラり  
 秋乃月也ラうラさラりラくラはラり  
 てラ此ラのラ也ラいラつラとラてラ月  
 身かくラうラあラまラしラとラくラ思ラひ  
 じりさラんラ人ラさラまラ下ラにラか  
 うラうラへラきラ事ラあり  
 雨ラ乃ラ火ラ燈ラよラ火ラをラさラくラ時  
クハ

せあラよラそラのラ火ラろラとラよラひラへ  
 一  
 うラうラげラよラうラとラらラふラうラはラへラ。さラ積ラ雪ラ  
 こラろラひラちラらラぬラやラうラんラのラゆラてラ炭ラとラつラむラへラきラあり  
 八ラ懐ラのラ衣ラ幸ラにラ供ラをラ此ラ人ラ浄ラ衣ラをラきラてラよラよラて  
 炭ラとラさラくラ積ラきラれラもラあラるラよラ識ラのラ人ラ白ラきラ把ラと  
 きラこラうラあラ日ラ冬ラ火ラうラとラらラあラらラくラうラうラのラうラ  
 此ラとラちラさラれラきラり  
 想ラ夫ラとラいラふラ樂ラハラ女ラれラとラこラとラこラうラあラ子ラ故ラあラんラふ  
クハ



一六あつた。もとハ相府蓮。文字のかよへ子也。  
 晋の王侯大臣として。家よとらさどとうるそ。  
 せしせし時のかくあり。是より大臣城蓮府也。  
 一〇廻忽も廻鶻也。廻鶻國としてえひどのこつ記  
 國あり。そ夷漢よ然して。ほよありてとのこ  
 う國のかくと参せしあり  
 平宣時 フサノキ 大佛陞與舟也  
 東鑑云治十五年自弘安十  
 年至平安三年北条五郎時  
 忠後改宣時  
 平宣時朔辰むのほむり  
 ころに最明寺入道ありま

系圖云時政時房朝草宣時  
 執権永恩寺殿

最明寺入道 時頼也上よん  
 えりり

あとや 異狩あり  
 ろんろ 並位きころ  
 並位こ  
 さしし さしきこ  
 くはく さつうけのさ  
 きああり

乃ふよんろく事あるしあ。  
 やうとやまうくむこれのみ  
 くてとくせしやとに。又はあり  
 て並位あとのさういぬまや。  
 並位いともあありとむさく  
 とありしうんまべう並位うらくのまあめて海  
 ころころいふてうしはうろくさとりそ入てそそか  
 て。この酒とびとりころんろくしきれたや







とよめり俗よりてまふと  
とむ

一献 礼記一献之礼賓主百  
拜 曲礼君宇之飲酒也一  
爵而也 灑如也 二爵而言言  
斯三爵而油油以退

隆辨僧正 鶴留別當也宗尊  
將軍御木例之時致祈禱加  
持依為効驗為恩賞拜頓羨

濃國岩瀧郷被任僧正  
ふのしく非れしく

晋魯慶鐘神論曰親愛如兒  
字曰孔方失之則貪窮得之  
則富強無翼而飛無足而走

解嚴教之類開難教之口錢  
多者處前錢少者居後云云

火のかりきりよつき  
易乾卦曰水流濕火就燥雲  
從竜風從虎孟平曰猶水之  
就下也

宴飲琴瑟 音樂女まよと琴瑟  
と云

折入を 是より上大福長共  
の詞と空て是より未善  
ク論あり

論語注云抑反語詞  
後漢のま伏波守後奴と  
つらうしと浮屠氏よを是  
と有賤餓鬼と云るり

とふはつる是利の際物心り  
あつひとやされくまへ刃に  
さあぬとて多きの際物三十  
あつて女おとのふ小被まて  
せさきてはよつうまされたり  
時足るる人のちうくまて侍  
しうがさり侍りあり  
或大福長老のいづく人かま

ろつとさうとまてむこあり  
海とつうくき也。まうしそてい  
きうひはしとめるのこを人  
海とつえんと思つ。すへく  
先を心つうひと映行まへし  
心と云ハ化つ。いあつ人百  
常任乃あひは任して。うりうも  
をまると教まるとあつれ。是す一



瘡疽と病との

貧富よくあり 貧者の賊

と求むともいふ富人の賊

宝多きれともいふ一も

ちひす貧者も又買あふ若

又貧者も是れともいふ

安樂のふりて富入り

おかし

乃利心也。次は方事此利とくか

ぬへううい。人の世はあり自化よ

まご

つきえ而利無量あり。欲は

あつち

て志とときんと思ひ。百万の残

ありといふとも。志うらも任まへううい。而利ハやむ

時あり。賊はつらう即あり。かきりある賊をりらと。

うさうさだれれとさうさうさうい。而利ハやむ

すよあうい。我とわらう海とへき悪念きこいぬり

どかうつしとねきおして小要よのあひへう

い。次は残と奴のともくして。つらひ利も物とさう

と。みく貧者ともぬううい。其のともく

それともくねそれたうともて。さういへりあう

ともなれ。次は知よのそむとらふとも。ううう

ひあうなうい。次は正むうして物とくくす

一。び養ともあがつて利ともめん人き。富の

きこらうい。火のくらきるよつき。あうのらうい



おろくろくふりしとくあるへし。後つらりてつきさう  
えん 時を。窠飲多々をこしせぬ。若しをかきり。  
 所教とまきしとむ。正とくまへりやとく  
 たのしとゆき。柝人き所教をぬせんくまよ  
 賊と求む。後と成ともくもへ。ぬくひをかまよ  
 ぶくぬ也。所教あきともくまへり。後あれぬ用  
究竟ハ即ヨハヒ  
天台家ニ六即あり 理即  
名号即觀行即相似即分身  
即究竟即是也 理即ハ佛法  
まろひん くらんバ。金負老也。ねがひ。  
 何とくまへり。いとせん。ばとれ

乃名字ともちぬ薄地底  
 下の丸夫乃至畜類まで皆  
 仏性を具するを云るなり各  
 字即ハ佛法とも云るなり  
 たるなり。觀行即ハ坐禪修  
 行すりの相似即ハ仏菩薩の  
 行に近く似る也。分身即  
 ハ菩薩の位まで衆生淨度  
 のためハ變現する也。究竟  
 即ハ妙覺の位如來地也。仏  
 毛ハ九丈一切の拘まり  
 類ハおまて悉皆仏性あり  
 を究竟ハ理即ハ何とゆ  
 悟り同未悟と云るハ發之  
 又ハ有肉成仏作什處為迷  
 倒之衆生とも云也

ては。く人百の望をたちて  
 貪とくまへり。後と成とも  
 たり。欲とまけてたのしと  
 せん。ゆるも。志く。賊まらん  
 まは。癡癡をやむ老。あつよ  
 あつひて。そのひとせんあり  
 ハ。やまきらん。あつ。あつお  
 ころりて。ハ。多入富。く。ところ



大欲ハ妄欲ニ似たり 聖海總

録百九十九日欲生則三戸

生欲減則三戸減故至人曰欲者不欲不欲者欲云云

云云有慳實の人々皆欲深

して一液半液と折れめとも法生のためよあまこの金銀を費せいむと

多き人極樂は生れて金玉の堂に居て百味此飲食をうくる大樂は遊んと

の欲心ありゆへは今世まで布施をせざる妄欲に似たり

究竟ハ程昂ニ似たり

大欲ハ妄欲ニ似たり

堀川政 久我一門基真太政

大臣号堀川基俊太納言父

也 けさのまへ 仁和寺をいへ

一ノ洗云弁寺と云今此仁

和寺あり也のりこ野あり

今の中寺地を号は龍聲寺

今の中寺地を号は龍聲寺

狐を人よりひつくるもの也

堀川教よて全人うねる

足と狐をくらり 仁和寺は

てより中寺乃あとも

より溪添へ移り龍安寺の

り西のくこある世と中

寺此の場とくりけ石れ

事也

下法師は狐之飛へつて

くひつきまねん 刀とぬき

て是とせせくあひこまきりニひきをつく

とひつつきころりトねニハよきね法師ハあま

あくらつきあつる へへあつりきり

龍秋 豊原氏樂人の釜と云

家也此下より豊筑後統秋

り足並也豊原氏を略して

考と云ん

短魚 早下れぬ

龍秋ハひよとらしてきやん

しとらと老あり 先の日あり

しとらと老あり 先の日あり



荒塚 通言の茂之

横笛 幸代笛の事也

十二律 数ある事吹入

ありすハ流えくくく人又

安人喜めぬ暇之

金持巻四

友よ

ていよく短く感のつりきりあ

く

く。荒塚の事あれとも横笛

乃

乃又穴ハ柳よりきりあ

つりこと。むうくふをなほ。そ放き。干れ穴を

平調又の穴

下

平調又の穴也。下平調也。そ又下勝終調と

てり。上れ穴双調次ハ鳥終調とをきりて

穴 莫終調あり。そ次ハ平終調とをきりて

中乃穴盤渉調。中と六とのあをひり

仙調あり。かやふるる一律とぬすめ

り。又の穴は上のるは調子とをきりて

去りもるるとくくくくき放りて

不ばあり。されえあの穴を少く時ハ必のく。此を

あへぬ時ハ地ハあは吹うり人くくく

料管のつりてはあり。先を遊ば生を

をきりと云うとけりありと

ゆりき。此日よ京後りや

景茂 大津氏八幡の山

不知

子曰後生可畏焉知来者之

論語子罕篇

失道



とつともあろし優り先毛  
篋吹地卜れ紫人也

ハ篋を志く人おろせ

もらふれはて梅くさうりあり。篋ハ吹なう

いきれうちまて。うの志く人。まてゆくおあれは

穴くふは傳のうふ。性骨とらりて心さう

ふあ。又れ穴乃こふくさうにむとへよらくと

さうりもはてむへくさうに。あく梅を志いつた

乃穴もあろりよりす。上も志い法を志

呂律れらのようかはさうを  
首楞嚴經曰羅刹女瑟笙篋

少記ありは。呂律の物よりま

琵琶雖有妙音若死妙指終  
不能發汝與衆生亦復如是

さあ人のとく也。ううかりの

れ失ふあはれと中き

あふ事をも志くハあしく

かこらぬるあれとも。天五志れ衆

衆の志けよられといへる

天王寺れ修人の中納。當

寺の衆ハよく園を志くへ

あを志く。地乃れめてく

天王寺 推古天皇の沙宇聖

徳太子建ゆ小多因持國増

長廣目乃空天れ像を安置

すりゆ人子空天王寺とあつ

伶人 音楽すう若と云黄帝



乃時伶倫といふ樂人のあそ  
まゆりて後世は伶人と云  
あり

とくせ

六時堂

其鐘調のむさうなり

八月十五夜のあそ 源真

水乃面又照月あるをかきつれは

とにちる秋れりなり ぬまう

涅槃舎 二月十五日也

聖美多 太子の忌日 二月廿

二日也

いづきのちまををらるのへ  
尚書云八音克諧無相奪倫

鏡本巻四

三十一

とこのゆりゆりなり。かより  
をすくれり。ゆへきとちよれ  
此時の園いづれはゆりをとんを  
とん。いそゆる六時堂乃あれ  
後あり。そをた又其後園のを  
ありあり。室を累りほひひく。  
あがりゆりゆりあへき故よ。二月  
涅槃舎あり。聖美多をまて

乃申るを指南といふ秘苑の

ゆりあり。け一洞子をりらそ。

いづきのちまををらるのへゆり

也と申さ。元後のあそは又後

洞より入。是を常の洞子。

祇園精舎今れ母をを院れあ

也西園寺のかみ。又後洞お

いらるへとて。あまのうひゆ

女孝の洞子 平家物語に

祇園精舎乃後れを法行を

夢のむききあり

祇園精舎の多孝院

大蔵一覽第二云佛大檀越

須達多長者建之云云

祇園太子の園を須達り

めえて建之故祇園といふ

西園寺 拾芥云永盤聖良太

政入臣公經公家

朱墨本

三十一



浄金剛院 三三山の南太泰  
 の東に内院あり  
 拾芥云本名天安寺待賢門  
 院浄建立也浄の字と法と  
 多すかあり法金剛院を法  
 縁の推野あり

建治弘安 皆後宇多院の并  
 号  
 海つりの日 夜夜此まかり此日  
 放免 東鑑二十三 建保六年  
 六月將軍家空朝任大將為  
 拜賀兼鶴置隨共江判官能  
 備布衣冠草緒納尾靴太刀  
 御等三人雜色四人調度懸

久られきれども。うまはらり  
 きろとを國あり尋出はせ  
 たり。浄金剛院の持れども。又  
 けんがこころぬ  
 建治弘安の比。東鑑の放免  
 六つを把よ。あともやうまら。銅此  
 布衣み端まてるとはくろりや。  
 毛髪まはらし。しとくく。

丁人放免 四人

くもの狩りささう水干よつ  
 きてあれ心  
 くと乃狩にあれさうゆらまきせ  
 かせらうく予人たれし  
 道志とも の 職原下 檢非違  
 使の下よ道志を明法道軍  
 六位時任衛門志郎蒙使草  
 旨也九志者奉行使廳諸人  
 事之故以當道為其撰此号  
 道志也明法道の軍れ使廳  
 の志とまり衣衛門た束門  
 代志となると道志とよまら  
 つきとの 祭礼の時とまりを  
 のつきおく上は放免れつき  
 そのとあつむきまら

この狩りささう水干よつき  
 て。あれ心あといひて。さし  
 ともつひよえん及ひ侍らまとも。  
 真ありて志く予心ちあてこ  
 う侍らまとも。むたう道志とのの  
 今日もくうと侍ら也。びこら  
 つきとの年を送て。ささうと  
 乃かになりて。あれれりき把



る着 衣服車馬等のうきり  
皆法合にさくろも也

人よもさせてみつゝはつこさへもさへさつ  
きくろーむありゆら。ひもえらるー

竹谷  
東二条院 考盤抄相國家氏  
公の山息女公子の御也後  
深草院の名也

光明長言  
沙石集二下云醍醐の竹谷  
の乗於金比上人ハ浄土宗  
ハ明通と安えき亡魂の菩  
提とよらよまハ竹の法り  
すられしとと勅宣れ下り

銀巻書目

とねつてつきてたれ神を

竹谷系於本。東二條院へ

系りてさくろもさるに亡志乃  
ついで  
追若も。何事り勝利あり

きと尋させめされん。光明  
ええさくろいげうんだら  
去言實遊平陸羅屋中

きろよハ宝篋印陀羅尼光一  
明長言のすられしとと

やされしととさくろも。才子や  
もいふたうハハ路きろろ。念

仏ふまはるしととさくろも。才子や  
うとヤ系於本。我家されはさくろもハ後が  
しととつととも。西さくろもと追福は降

して。巨益ある人しととさくろも。經文と見及ん  
ゆりもえさくろもとさくろも。世路りく。くハ  
さんとあひて中經のたうさくろも。さくろも。げさくろも

失道巻目

三十四







を祖也

通憲入道 少卿言入道信西

也法るは通すう人也

孫孫師 東鑑六文治二年三

月一日預州妻静及母磯禪

師自京來于鎌倉下略之

向うまさ さやまさ

仏祚の本縁 仏祚の由来縁

也

白拍子の根元 源平盛衰記

十七云世は白拍子といふ

ものわり漢家より唐氏楊

貴妃玉照云あといひハ

皆是白拍子也我朝より多

羽院成りては唐の千歳若前

として二人の遊女舞とてめ

舞師といひきる。女よとて

てまひせたり。ちろき氷干よ

向うまはをさくせ。鳥帽子

をひき入るりきれる男舞

とろいひきる。舞師といひ

めちろくといひきる。げん

とつきり。是白拍子と根

元也。仏祚の本縁とて

たり略之

泳の先行 河内守大監池原

氏物仲より河内中とてまひ

人の他也

龜菊 東鑑二十五卷外三年

五月武家背天氣之短依舞

女龜菊申狀下略之 龜菊

と龜前といひ也

伝法前司の長

藝古の巻 藝古の子尚書

典より出たり又後漢書植棠

曰今日植棠藝古之力也

ハ学問の力也と云茂也

樂府 古樂府あり新樂府あり

又文選より樂府の詩歌との

ぬ。是乃源光の初なり。は

とをつくりきり。は乃羽院

乃他もあり。龜菊よと

へさせ給きりとも

後乃羽院の初。伝法前司

乃長。猶古れかまはるきり

り。樂府の初。後乃書りめ

まはる。七瀬乃舞とて少う忘

快進巻四

三十一



せり元稹集白居易集等  
樂府乃欲甚多一長恨方侍  
し樂府伎女とあり又樂  
府雜録といふ書もあり

七德齊 貞觀七年正月更各  
破陳樂曰七德舞七德者蓋  
取禁暴戢其保大定功安民  
和衆豐賤之義也

一藝退之進字解各一藝者  
無不庸

て不伎よせさせたまひきれん。げに法入るを杖  
おまゐり。げに長入る家物法をつくりて  
生仏といひきり。育目小と人へてかゝる勢きり。

よりきれん。又沙冠者と異ふ  
とつこよきりと。心うこころは  
て。學問をすく。道世志より  
きりと。意法和尚一藝あるを  
のまへ。下部まてもめしとまき

さて山門の事を 意法はめ  
とれとらゆへまゆりく  
まゝなり也

九郎判官 義経也

蒲冠者 從五位下 三河守範  
頼於遠別蒲生御厨出生之  
同号蒲冠者頼朝弟也

さて山門の事をとことんゆじ  
くうきり。九郎判官乃るうハ  
くうきり。蒲冠者のうハ。くうきり  
かのかんダヤ

さりきり。のや。おのくのうきとちりしりせり。  
民士のうらうまれ。生仏東國乃者まて。民  
士うらうまき。てうせきり。彼生仏うまれつき  
乃し志を。今れ現に法呼ハまゝあひしりあり



六時礼讃 晋の惠遠法師著

社をひすひて蓮花漏をき

さみ六時を礼せし六時念

仏の権典とす唐の善導が

付礼讃偈と云ふひあつて

日夜の勤行とす安樂く作

ありと云ハ異説あるや

と浄土家の人ヤキ

安樂 法然此弟子也住蓮安

樂と云二人ありなり羽院

の時別時念仏と称め六時

礼讃と唱て發聲此其賤群

集せしよ女弟子して出家せしは後多羽院大に建麟るして住蓮安樂と

罪よと云ふ小官人秀能も作て六條河原まで安樂を執法名如願

太秦 廣隆寺也秦氏の人來てりし初より秦寺と云也 善觀房

法華頌 兩卷上下あり是も善導作也ゆへにせつきり多善觀房不為致

六時礼讃ハ法然上人の弟子

安樂といひきる傍。種多とあ

つめてはくつてつとめよ

きり。そは秦善觀房と

云傍。しんうせと定てあ

ゆよあせり。一念此念仏乃紅

集せしよ女弟子して出家せしは後多羽院大に建麟るして住蓮安樂と

罪よと云ふ小官人秀能も作て六條河原まで安樂を執法名如願

太秦 廣隆寺也秦氏の人來てりし初より秦寺と云也 善觀房

初也。法然院乃代らるるはけり。法然

讃をばあしく善觀房と云也

十代の釈迦念仏 千本乃釈迦念仏ハ文永此は如

如攝上人 掃上人始られきり

妙觀 元亨釈書云勝尾寺講 妙觀 元亨釈書云勝尾寺講

堂觀音像宝龜十一年七月 十八日比立妙觀刻之千臂十目莊嚴端嚴又加四天王像九五尊三十日而成

八月十八日妙觀合掌而化觀音之灵應也 仲芳攝別勝尾寺募縁疏にも妙

觀像のりきり 又條内裏よりきり

五條内裏 桓院院時皇居 ありといひつゝ

金持

三十一

法然

三十一



務大納言

未練の銀練多シせぬと未練と

云々までハ功のいぬぬ狐之

務大納言を教へしれ侍人。

教上人ともタラト黒戸タラトして基誠

うらきつよ。みごとくききて。たつたあり。たうと

見むき。これハ狐人キヌ乃やうよつらぬてさう。れをき

つらとあれきつひのよとよまられて。まといひのけ

よきり。未練ミのきつひミを換カへきつよと

園別當入道 基氏卿天福二

年十一月十七日上辞狀出

家法各因空

無双也

庵丁アチ志あり。あつ人れき

空乃別當入道ハ。あつるあき

庵丁 日本庵丁者のくくハ

何條家の庶流山蔭中納言

也莊子養生主篇ハ庵丁牛

と解トを洋トより下氏よ

くハシナフ庵厨ハシナフのヲを知て宰煮サ

あゆハハ庵丁と云也

ためコい 猶ユ勝コとす

百日の鯉 百日の百毎日つと

めて鯉キをきんキと也

はなてヤキときん 是ハ世ハ中

のりきんとあり

あて。いキ鯉コをいキたり

きれハ皆人別當入るれ庵丁

と見んやとと人とも。たやい

うらいてんといつととあ

ひきつを別當入るさり人

て。いやと百日の鯉をきつり侍

ふと。今日うこ侍りへきつりあつた。まげさ

うきんとてきつれきつ。いキつキつキつキ



く真ありて。人ともたのへりきりと。あふ人  
わ山を改入る 西堂寺云経  
云也一条相國ととアキ  
 山を改入る教子。くりや

されたりきれた。もつれりとのき。ふりうさく  
 しがゆりあり。きりぬへき人あへんき。んと  
 いひとん。れよりあん。何条有日の鯉ときん  
 そもの給。くりし。おがえ。と。人れ。り  
 給。り。と。お。く。ま。ひ。て。真。あ。り。と。  
 真ありてや。く。り。あ。り。た。り。と。や。ま。れ

人の郷食まじりとものつら。おき。う。に。う。は

たる。後によき。と。た。其。と。あ。り。と。り。お

人よ地まじりとものつら。おき。う。に。う。は

論語堯曰篇猶之与人也出

納之吝謂之有司 孟子曰

可以與可無以與之傷惠

た。あ。も。つ。ら。と。り。と。り。

らんと。ひ。り。と。の。あ。り。と。り。と。り。

し。と。り。と。り。と。り。と。り。と。り。と。り。

り。と。り。と。り。と。り。と。り。と。り。

す。て。人。と。り。と。り。と。り。と。り。と。り。







ら獲し。さうき人き。すい一のふゆよ  
くんえ。まろくみ。めね。まら

万のとりあ

論語多聞爾疑慎言其餘則

寡尤又曰言忠信行篤敬

雖蠻貊之邦行矣

所えくら気多

以くら神そく傍若無人也

俗子志すのくらか

との敷く

さ。あれ。さう。は。ま。よ。よ。め。だ。あ。え。さ。う。う。親。及。し  
て。人。さ。あ。さ。う。さ。う。ふ。す。う。よ。あ。り  
ふ。す。も。あ。り。し。さ。う。う。い。ま。よ  
よ。い。あ。う。う。と。う。ふ。あ。い  
ら。う。な。い。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ  
ら。う。い。や

さ。あれ。さう。は。ま。よ。よ。め。だ。あ。え。さ。う。う。親。及。し  
て。人。さ。あ。さ。う。さ。う。ふ。す。う。よ。あ。り  
ふ。す。も。あ。り。し。さ。う。う。い。ま。よ  
よ。い。あ。う。う。と。う。ふ。あ。い  
ら。う。な。い。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ  
ら。う。い。や











たちやう。とめつし。うさ。故あくと涙くこ  
て。いふ教より。時務ときむのす。八世はつせい院いん。とがめどや。  
空下くげありとらん。どのくあや。とて。後ごに代しろに  
とありき。却かへのつ。ふか。らん。あ。い。よ。ん。  
おゆ。かりて。おま。く。押おし。ま。ぬ。へ。き。う。り。  
き。ろ。社やしろ友ともと。あ。ひ。て。び。法はふ船せんに。獅子ししの。た。て。ら。れ  
やう。定さだて。あ。ひ。あ。り。こ。ろ。ふ。侍さむらい。ん。ら。と。あ。い。ハ  
や。ま。い。ん。れ。ん。は。そ。ろ。ろ。り。い。さ。う。あ。ま。い。ち。う。

金巻巻口

四十五

くとも乃信のぶと。き。性しやう。不ふ。依よ。り。あ。り。や。ま。く。  
所ところ。も。ろ。と。す。へ。あ。ま。り。て。つ。よ。き。れ。ん。上かみ。人ひと  
の感かん涙なみだ。い。つ。つ。り。あ。り。ふ。り。り。  
柳やなぎ管くだみハ。双ふた短みぢ冊さふ。或ある。鞠まり冠かん。或ある。又また。建たて  
善ぜんの。対たい。又また。澄すみを。写うつ。す。を。由よし。多おほ  
臺たい。あり。柳やなぎを。ま。り。て。ま。り。也なり  
け。この。木き。抄しやう。重おも。半かみ。代しろ。義ぎ。伝でん。  
あり。内うち。經きやう。冊さふ。を。ま。り。て。建たて。上かみ  
乃すなは。と。き。冷ひや。泉いづみ。家いえ。ハ。重おも。い。こ。  
ら。ら。ら。く。あり。又また。三さん。象ぞう。二に。光くわう  
院いん。の。お。借か。と。て。重おも。半かみ。ふ。り。  
表おもて。函はこ。代しろ。義ぎ。あり。表おもて。す。り。は。  
半かみ。を。も。ち。ひ。追お。長なが。の。時とき。經きやう。卷まき

や。あ。い。ん。を。ま。り。す。ゆ。り。その。ま。  
た。て。所ところ。も。ろ。と。す。へ。あ。ま。り。て。つ。よ。き。れ。ん。上かみ。人ひと  
ふ。へ。き。ふ。や。ま。い。ち。う。と。い。ふ。て。  
き。ろ。社やしろ友ともと。あ。ひ。て。び。法はふ船せんに。獅子ししの。た。て。ら。れ  
や。ま。い。ん。れ。ん。は。そ。ろ。ろ。り。い。さ。う。あ。ま。い。ち。う。

四十五











也。後多羽院乃以方に。神と被中一首れら  
 小。あしりりあんやと定家口は尋作られた  
 古今至系棟梁<sup>今昔</sup>の事也定家卿  
 自讃の事未考之  
 是すきりおせくまひく神と云ふらん。を  
 侍進ハ。何よりさやしく入き。と申されらん。り  
 毛。時おあしりて。中あを笑悦也。乃の實加  
 あり。ま運<sup>まゐ</sup>あり好と。としくくあらん  
 九條相國  
 禁中へ官位とのま  
 とくれ侍るあり。九條相國

あつひを新法をヤ上尉乃  
 状也くまきと後あり  
 くらんとのんまると也  
 常任光院 舊跡在東山  
 在兼卿 余儀正二位菅原家  
 也唐橋の祖在良<sup>ヨシ</sup>乃弟輔方  
 八世代孫也  
 也也 下書也詠茶文字と  
 のし  
 行房 世そ寺行成口より十  
 代の孫也鍾尹の息代行尹  
 乃弟也  
 いこ 模範  
 られら  
 伊通公乃款<sup>カケ</sup>也。いと那  
 ぶしとあ記部目をもりき  
 のせそ自讃せられり  
 常任光院乃つと鐘<sup>カネ</sup>此<sup>コノ</sup>記  
 也。在<sup>あり</sup>龜<sup>カメ</sup>にれま也。仍<sup>ゆえ</sup>平朝<sup>ヒラ</sup>り  
 清虫して。いこよら<sup>イコ</sup>の所  
 せんときりよ。な<sup>な</sup>乃<sup>乃</sup>入る  
 彼<sup>カ</sup>まをれおく。ん<sup>ん</sup>乃<sup>乃</sup>結<sup>結</sup>し



乃乃卯夕とをきられん。夢百里よりき  
 こゆといふあり。陽唐此韻と見ゆふり  
 百里あやまありうとやうもいふとよくそんせ  
 せむもさる。よのせうもふありとて。管老の  
 きとくといひやるとたうもあやまり侍るま。  
 数行 行の字庚韻よも陽韻  
 りのひきり庚韻ゆくま行  
 歩の義也陽韻よてハ行列  
 乃義也教韻はくハ行跡徳  
 行の義くあてて教ゆを  
 教歩代義よとハ庚韻か

不へ陽韻あまハむかつら  
 ありとよせ

三塔 山口乃東塔西塔横川  
 あり

常妙堂  
 龍華院  
 佐理 正三位前太宰大貳參  
 議佐理 卿小野官孫一條院  
 長徳四年七月晦薨五十五  
 歳公卿補任

行成 正二位大宰權師權大  
 納言行成 卿田融院御宇天  
 祿三年誕生後一條院五壽  
 三年二月薨五十六補任

人あまこなあひて三塔頃  
 礼乃子侍りよ横川此常行  
 堂此うら。龍華院とくき教  
 胸のき額あり。依理行成の  
 あひたうこくひあつとくい  
 まるこ皮せはと中侍よりや。  
 雲借とくくくく中侍

うあー

人あまこなあひて三塔頃  
 礼乃子侍りよ横川此常行  
 堂此うら。龍華院とくき教  
 胸のき額あり。依理行成の  
 あひたうこくひあつとくい  
 まるこ皮せはと中侍よりや。  
 雲借とくくくく中侍



位署 姓名の上は官位と云  
 連系と位署と云  
 二十二年五月十六日  
 依程なうん裏あまへ  
 らひといひたつしよ  
 つまらぬ乃巢よていせけ  
 あるとあくを記のこひて  
 足傳よ。初め位署の字  
 号さこうふんえうく人  
 とれ真なり入

那宗隆寺 道眼

八災

八災 身歡苦樂尋伺出息

と八災と云花乗法教よあ

西化 師とん能化と云弟子

とん西化と云あり

那宗隆寺

道眼

八災

と八災と云花乗法教よあ

とん西化と云あり

とん西化と云あり

えさうと云あり

いひ出と云あり

賢助僧正 醍醐三室院也月

野家の人也

加持香水 正月八日あり

又日の朔まで成法あり

賢助僧正

醍醐三室院也月

野家の人也

加持香水 正月八日あり

又日の朔まで成法あり







一、情ありと恨まう人あんありのとの路ひ出し  
 ころおさうみこ心はゆらぬとやしてやぬ。  
 びりほよきくゆらハ。彼種々の葉。ゆつりぬれ  
 ぬらり。人の心強りありて。さうゆせをさつと  
 ころころとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらと  
 さもその花。をありとゆらゆらとゆらゆらと  
 とく。ころりゆらゆらとゆらゆらと

箕宿 東 廿七星 角九度 房心

八月十八日 九月十三日

尾箕北方 廿七星 斗牛女鹿危  
 室壁西方 廿七星 奎婁胃昂畢  
 觜參南方 廿七星 井鬼柳星張翼軫  
 星つ毎日あててくまの宿と守道代とろくろりまを替ふ六廿八宿  
 を次第して目扱又配と日かゝる吉備公の相傳ありとて別よあはれま  
 するまの中比大内四録すり日牛宿ありとて牛を捨てて廿七宿とせり今  
 かん久足れん八月十五九月十三婁宿よあてふ初とよ兼ぬも牛宿と除き  
 ころをを用ひころあてへ八月一角二九三度四房五心六尾七箕八斗九  
 女十廬十一危十二室十三壁十四奎十五婁也九月一廿二房三心四尾五箕  
 六斗七廿八廬九危十室十一壁十二奎十三婁也 婁宿清明未考之

故ふ月ととてあそふよ良類と云

信長浦 奥列又信長郡あり  
 新古今よ

ろろとてころきりのかんめめ  
 ちののろくれあひのころあま



は發端のてしとくふのふ中  
りふくきころあり  
あざく 不挾 深谷類聚  
あり

くくぬの山 山城の名也  
暗谷山と云あり  
古今よ

おめ乃む白の妻へまくくぬ山  
やこよこゆきと云るくそまき  
おぢよ暗布山とかきり  
貫之りくあり

秋きりくくちぬる時ハくぬ山  
おつろくおくそ又えりくあり  
鞍馬山ハ別よ立ろり  
くくかろく兄弟也  
よけあき 不似合義也

あつ月人 田舎人あり  
さそくありあは  
古今 小町りき  
俺ぬきハカと云きま乃ぬき  
あそふああふんえんくくあり  
おくり人 媒也 遊仙窟ハ桂  
心とくきり 媒人ハ双方  
あきやまはらりりや  
て婚姻とまふ  
あのかまよ 幸也くきり  
くくまへハあちきあまよ  
あり

くきくく山  
龍波山と云く山志きく種也

りり人志きりくんよ。まろりか  
く通りん心のまらう。波く  
は長とあり山ゆくくのまり  
たきくともおがくくめ。おや  
まろりかろくして。むくお  
よむくくくくく。くくく  
ゆるりぬへし。まよありく  
お女のよけまじを法師あ

やれあつ月人あり  
まろりくくくくく。くく  
ぬああつくくく。中人  
くくくくくくく。くく  
くくくく。くくくく。ぬ人  
くくくく。くくくく。あま  
くくくく。くくくく。あま  
くくくく。くくくく。あま  
くくくく。くくくく。あま











妄想 無業禪師曰莫妄想

ありと憂中回吾は怖せる

ありあり

放下 禅語は放下者として

ありるをさるるを

とりあさん。すへて心取皆

まうまう

妄想あり。心取心不きこ

らば。妄心連亂すと志り

まうまう

て。一事とをもあはへり。盡す万事業

放下して。心不むり。さりきく。心取

あきき。心身あり。とらりあり

とらき。長のき也。心取

時のき也

遠順 逆順也 佛眼遠禪師

りりあり。事き。ひとへ小苦

云苦樂逆順道在其中動靜  
寒温自愧自悔

樂のためあり。樂也。心取

二よふ多欲之味 礼記曰  
飲食男女人之大欲存焉

はこれにあひとる事也。これ

とらとむり。とやむ時あり。樂欲するところ

一やはふあり。ふり二種あり。心取と

とのかまきあり。二よは多欲。三よは味ありと

よろの乃ぬくひび三よを忘るは是顛倒乃也

とらにこそして。そこそくはとらひあり。心

先きらんりきとら



佛説三身壽量無邊經曰文殊  
 白佛言我等從昔聞如來說法  
 如來何佛聞此說法佛告文殊  
 言過四十一重內大院兼大毘  
 盧遮那說法文殊重白佛言四  
 十一重內大院何者是耶世尊  
 復言過十住十行十迴向十地  
 等覺內大院兼妙覺地大毘盧  
 遮那說法文殊重白佛言妙覺  
 地毘盧遮那從何佛兼說法世  
 尊復言妙覺地毘盧遮那兼無  
 始無終一心一念本佛說法文  
 殊重白佛言無始無終一心一  
 念本佛兼何佛說法世尊復言  
 無始無終一心一念本佛兼無  
 心無念本佛說法文殊重白佛

八ふあるし一年。父子同い  
 く仏をいふある物よりい  
 せといふ。ちく云仏を人  
 乃ぬる也と又何人ハ何  
 とて佛をぬるやらん  
 父又仏れとへよりのま  
 ぶありとこそふ。又同と  
 へいひるる仏とん。何と

言無心無念本佛兼何佛說法  
 世尊復言無心無念本佛上更  
 無佛陀無前佛無後佛無心無  
 念本佛以不思議為體無本去  
 來無三身性無十界性云今  
 盡不記

へ依きると。又こそふまれ  
 又さ記乃仏れとへにあり  
 てぬるふありと。又とふそ

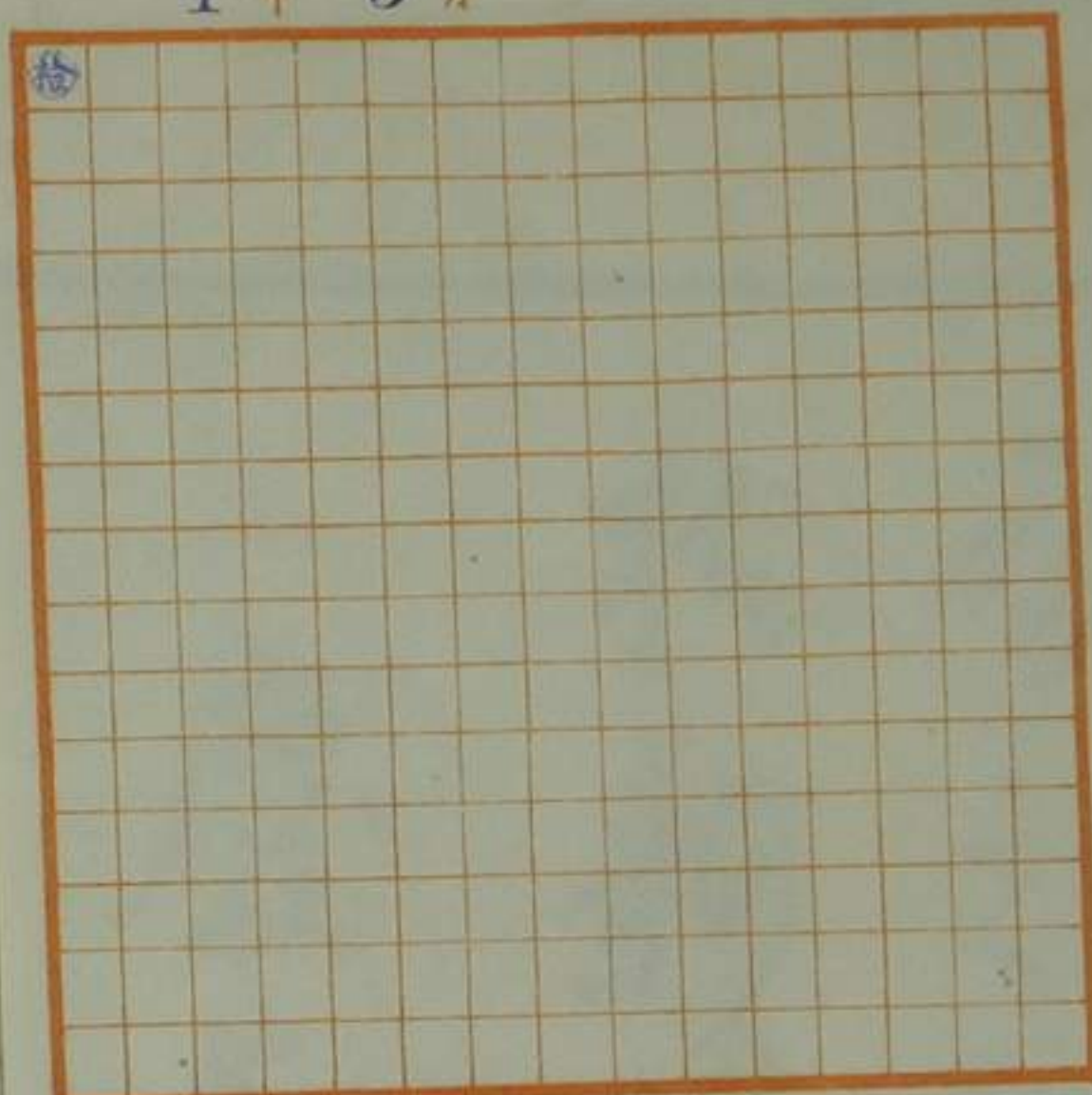
とへるめい字の才一乃仏をいふおふ仏  
 する依き中し。又字よりやありけ  
 せ。およりやこそきんとつひくまらふとい  
 つめら積てえこそへにありつと。諸人より  
 ころりて真一き



四卷内

廣園氏

4年3月



世間流布之本錯訛數多

今正文字倭魚重令

刊考也

貳年暮春吉辰

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '世間', '流布', '本', '錯', '訛', '數', '多', '今', '正', '文', '字', '倭', '魚', '重', '令', '刊', '考', '也', '貳', '年', '暮', '春', '吉', '辰'.*



世間流布之本錯訛數多  
有之今正文字倭魚重令  
於新刊者也

慶安貳年暮春吉辰

四卷內

廣園氏



